

明治時代の洋語文典における日本語 蘭訳英文典 『和蘭語法解（オランダごほうげ）』と洋語文典の 系譜

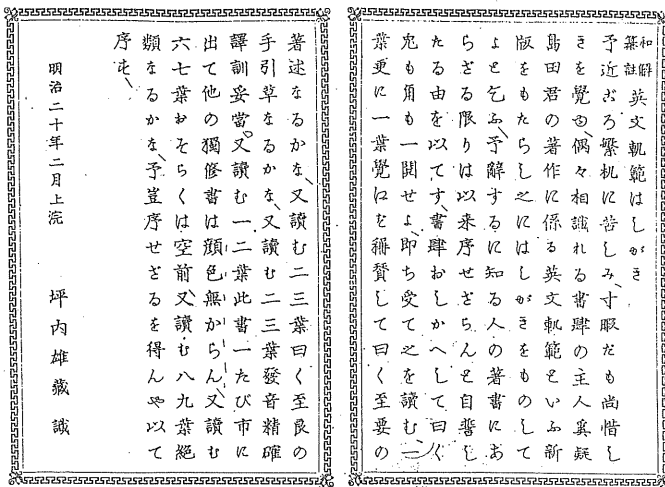
著者	岡田 和子
雑誌名	文学研究論集
号	13
ページ	13-44
発行年	1996-03-20
その他のタイトル	Die japanische Sprache der “wortlich übersetzten” Grammatiken die Übersetzungen von “Oranda-goho-ge” und den europäischen Grammatiken in der Meiji Zeit.
URL	http://hdl.handle.net/2241/14146

岡田 和子

1. 序
2. 明治時代における句読点の訳語
3. 明治時代の直訳文典における日本語
4. 蘭訳英文典『和蘭語法解』とその訳文
5. 結語——洋語学習と日本語

1. 序

前回、「二葉亭四迷の『めぐりあひ』とロシア語原文における句読点の比較」において二葉亭の《白抜き点》の意味を考察するに際し、明治時代の洋語文法書（英・独・仏）をその手がかりとしたが、明治20年出版の英文典『和解纂註英文軌範』に、坪内逍遙の手になるとと思われる次のような「はしがき」がある。



ここには句読点が打たれているが、これは、実は、鉛筆で手書きされたものである。中にひとつだけ《白抜き点》のあるのが注目される。一体誰が書き込んだのであろうか。この文法書を使用した誰かであろうか。今となつては知る術とてないが、いずれにせよ、この「はしがき」の《白抜き点》は、文学作品以外で筆者が目にした唯一の例であると思われた。

ところが、幕末の蘭文典の中に《白抜き点》が用いられているのを見つけたのである。抑も生民ノ音声ハ。我 邦五十音ノ清濁ニテ足レルカ如ク。大抵定数アリテ。事物ノ数ハ幾十百万。其定極ヲ知ルナケレバ。我 邦及ビ和蘭学ハ。唯五十音ノ記標ヲ変

化スルノミニテ。其名称ヲ呼フヲ得ルナリ。独り支那ノ字ハ。家、馬、見、聞等ノ如ク。我音ヲ以テセスノ外物ノ形ヲ以テス。是レ自他ノ分別ヲ誤レルカ故ニ。字形幾万。其音義不審ナル者。十二ノ七八ニ居ル。惜ヒ哉我邦中古以来支那字間雜シテ。方今ハ殆ト本来ノ言辞ヲ失亡セリ。故ニ通常ノ文章ハ。国字ト支那字トヲ相属セサル可ラサルニ至リ。支那字ノ音義不審ナルカ為ニ。論スル所ノ義理微妙ヲ尽サス。

これは、大隅重信の蘭学の師である大庭雪斎が安政2年(1888)に著した『和蘭文語凡例』から採ったものである。杉本つとむ氏の『江戸時代蘭語学の成立とその展開』Ⅴ(p.8)ではすべて《○》に直されているが、『外国語と日本語』(p.38)では《○》のまま収録されている。まさに、明治は維新元年より始まるものにあらず、である。文明開化は突然起こった現象ではない。言文一致運動もまた然りである。前稿において、筆者は、二葉亭の《○》の工夫は、孤立的に唐突に出現したものではなく、江戸時代の蘭語学習による十分な欧文理解の歩みがあったからこそ生じたものではないかと考えたが、この『和蘭文語凡例』の《○》は、まさしくこのことを証明している。そして、明治に関する研究を江戸時代と断絶させてしまうことの不毛さを表わしているように思われるのである。幕末に既に《○》が用いられていたのであれば、山田美妙・二葉亭四迷等は、《○》そのものを考案したという意味での創始者ではなく、《○》を、語学書を離れて、文学作品の中で初めて用いたという意味での創始者ということになる。

市販された書物で最初に句読点が用いられたのは明治7年であるらしい。『明治事物起原』には、

和文に洋文の符号

清水卯三郎、明治7年の春、英人トーマス・テーの科学初歩を訳し、[ものわりのはしご]と名づけて小本三冊を発行せり。横山由清の序文に横がきの洋文に、用ひる符号を、縦がきの和文に用ひたれば、最も奇異なり、その一斑を左に抄出す。

いでやこのものわりのてびきのいとを、あしたゆふべにくりかへしまよふふしくよみときて、よくそのふかきころろをえよ、よのをみなわらべたち、これをこのふみのいとぐちとす、よこやまのよしきよ。

という記事が見える¹⁾。藤林普山の『和蘭語法解』(文化8年・1811)及び『蘭学逕』(文化7年・1810)で既に行なわれているように、蘭学者の間では主に《○》が用いられたが、明治時代の洋語文典等では、《○》が句点・読点双方の役割を兼ねている場合が多い、『明治事物起原』のこの記事も、最後を除いて、他はすべて《○》で以て文末が区切られており、蘭語学習を離れて一般の書物に印刷された句読点の、これがその嚆矢ということになる。

この時は<奇異>に見えた句読点であるが、しかし、言文一致の創始者たる栄誉を担う山田美妙が、<その小説を書くや、行文中、盛に英語の符標を交へ、読者をしてーや?や!やに食傷せしめ>²⁾、

今の小説家は微菌小説家なりとは、其医学士の言なり、蓋し、其用標(一)はパチルレンの如く、(!)はバクテリアの如く、(,,)はコンマパチルレンの如くして、且つ、伝染性を有するが故なるべし³⁾

などと時に揶揄されながらも、以後確実に、洋語学習の隆盛とその歩調を合わせるように、句読点は、言文一致を目指す日本語の新表記中に浸透していく。

明治の新文体運動の眼目は、口語によるコンポジションの確立と句読法の導入であると思う。そして、この意識をもたらしたのは西洋語との接触である。今回は、この言文一致の底流となった洋語学習の、とりわけ明治時代の文法書において、まず、種々の句読記号にいかなる訳語が与えられたかを見る。何故なら、名称というものは、無意味な言葉遊びでは決してなく、ひとつの事柄がどのように理解されたかを示すものであるから、訳語の展開を知ることは、当時の人々がヨーロッパの Punctuation (英) / Satzzeichen (独) をどのように理解したのか、その理解の仕方を知ることになるからである。そして次に、これらの洋語文典で用いられた日本語はいかなるものであったかを考察する。言文一致運動が起こった明治20年当時、多数の直訳文典が出版されている。この「直訳」というのはどのようなスタイルの翻訳方法であるか。そのルーツはどこにあるか。そして、そこにおいて、蘭・英・独語等の欧文は、いかなる日本語に移されたのであろうか。

2. 明治時代における句読点の訳語

表1は、明治時代の洋語文典中に見られる4種の句読点の訳語の一覧表である。句読点は『解体新書』の翻訳で知られる蘭化・前野良沢にその淵源を求めることができるので⁴、若干の蘭文典中の用語を参考に付した。『和仏蘭対訳語林』は本木正英ら長崎通詞の手になる対訳辞書、『繙巻得師草稿』は高野長英著すところの蘭文法書である⁵。明治時代の洋語文典は主に国会図書館所蔵のものを使用した。内訳は、

英：55冊（調査総数 110冊） 独：2冊（同 61冊） 仏：1冊（同 7冊）

である。著しく英語に偏ってしまったのは、ドイツ語は国会図書館所蔵の独文典のほぼ全てを調査したにもかかわらず、句読点に言及したものが極めて少なく、またフランス語の場合は、所蔵本数そのものが英・独に比して極端に貧しかったためである。

《句読点》《点符》《句点》等の名称で呼ばれるこれらの諸記号のうち、訳語のばらつきの大きいものは《●》と《ゞ》である。

- 《●》⇒ ¹ 畢点 (2) ² 畢表 (2) ³ 讀点 (2) ⁴ 成句点 (1) ⁵ 終点 (1)
⁶ 終結標 (1) ⁷ 段落 (6)・段落点 (16) ⁸ 断句 (1)・断句点 (3) ⁹ 極点 (2)
¹⁰ 完了点 (1) ¹¹ 点 (1) ¹² 節尾点 (1) ¹³ 休止点 (1) ¹⁴ 完尾点 (1)
 ○《ゞ》⇒ ¹ 小線 (1) ² 分点 (1) ³ 區別標 (2) ⁴ 句点 (15) ⁵ 分切点 (1) ⁶ 小点 (1)
⁷ 句ノ小点 (1) ⁸ 小句点 (1) ⁹ 小句読点 (1) ¹⁰ 句読 (7)・句読点 (11)

特に《ゞ》が《句点》と呼ばれていることは注目に値する。現代の日本語表記においては、《●》に相当する《○》の方が「句点」、《ゞ》に相当する《ゝ》が「読点」であり、《句点》の内容が明治時代と現代とでは逆転してしまっているのである。明治を通じて「読点」という用語は遂に現れず、《●》に対する主な訳語は《段落点》である。まさに《点》と直訳した『獨逸文典(文論)』を除いて、《●》の訳語は皆「文が終わる」ということを意識したものとなっている。しかるに、このような様々な明治の工夫を尻目に、現代において最終的にこれを「読点」としたことで、結局は伝統的な漢文用語に回帰してしまったのである。

その他、注目すべき訳語は、Semikolon《;》に対する明治20年『ソネル氏佛文典獨学』の《半段落点》と、表1にはないが、Dash《—》に対する明治17年『文典和解英文指針』、明治20年『ビネツ氏英文典直訳』（栗野忠雄訳）、及び冒頭に挙げた『和解纂註英文

表1. 明治期の洋語文典における句読点の訳語（[]は訳者名）

	年 号	書 名		●	;	:	9 (コンマ)
	1788 以前	和蘭点訳考 (前野良沢)	点例	畢点	判節点	節点 重点	小頓 分点
	1810 (文化 7)	蘭字選 (藤林青山)	様式	畢標	半節標	節標 重畢標	区別標
	1817 (文化14)	和仏蘭対訳語林		畢点	半節点	重点	分点
	(文政年間?)	蘭登得師草藪 (全集本)	科目				コンマ
1	1870 (明治 3)	格質勃斯英文典直訳	句読論 句読点	読点	半重点	重点	句点
	1871 (明治 4)	洋学指針 (英字部・二編)					
	(明治初期?)	独逸初學必携 (全)	点記	Punkt	Semi-colon	Doppel-punkt	Komma
	1884 (明治17)	文典和蘭英文指針	点句法 点符	成句点	半重点	重点	小点
5	1885 (明治18)	英學五書發案内	句点法	終点	句読	二重点	句ノ小点
10		クワッケンボス氏英文典發案内 [高宮 直太]	句読標	畢標	半節点	節標	区別点
		無類捷徑英學童子解	句読点法	段落	半重点	重点	句点
		ブラウン氏英文典法詳解發案内 [近藤 聖三]	句読法	段落点	半重点	重点	句点
		クワッケンボス氏英文典直訳 [栗野 忠雄]	句点法 句点	段落点	半重点	重点	句点
		ブラウン氏英文典直訳 [源 綱配]	句読法	段落	半重点	重点	句読
	1887 (明治20)	ブロウン氏英吉利文典講義 (後編) [長野 一枝]	句読点	段落点	半重点	重点	小句読点
15		スウィントン氏英文典直訳 [蘆田 束雄]	句読 (句読)	(●)	Semi-colon		コンマ comma
		容易独修スウィントン氏英文典直訳 [大島 国千代]	附点法 句点	段落			句読 コンマ
		ピネヲ氏英文典直訳 [栗野 忠雄]	点書法 句読点	段落点	半重点	重点	句点
		スウィントン氏英文典直訳 [栗野 忠雄]	点書法	段落点	半重点		句点
		ソネル氏英文典發字 [中村 秀雄]	句点ノ記号	段落点	半重点	重点	句読
20		イングリッシュ文法主眼	句読	ピリオド	セミコロン	コロ	カンマ
		クワツケンボス英文典直訳 [水澤 郁]	記点説 句点	段落点	半重点	重点	句点
		クワッケンボス氏英文典直訳 (全) [山本英太郎]	点法 句点	段落点	半重点	重点	句点
		スウィントン氏英文典直訳 [斎藤 桂堂]	点書法 句点	段落点	句読点	二重点	小句点 句点
		和蘭語註英文軌範 (全)	点句法	段落点	半重点	重点	クワツヨミキリ句読点
	1888 (明治21)	スウィントン氏英文典直訳 [太田 二郎]	句読点	断句点			句点
		クワッケンボス氏英文典發案内 (全)	句読点法	段落点	半重点	重点	句読点
		[外川 秀二郎]	句読法 附点法				
25		スウィントン氏ニユララングーゼツソンス直訳 [石川 隼太郎]	句読法	読点			コンマ
		六月卒業英學自在 (全)	点符	極点	半重点	重点	句読点
		スウィントン氏英文典直訳 (全) [伴野 乙弥]		極点			句読点
		スウィントン氏英文典發案内 [銀野 義三郎]	附点法	ピリオド印			句点
		スウィントン氏英文典直訳 [渡辺 松茂]	句読				小句読
		ずういんとん小文典發學自在 [阪田 源治]	附点法	ピリオド			コンマ
30	1889 (明治22)	和訳小英文典 (完)	記号用法	段落	半重点	重点	句読

	年 号	書 名		●	;	:	9
31	1889 (明治22)	須田卿氏大英文讀義 [平井 広五郎]	点書法				
	1890 (明治23)	原書全訳スウィントン氏英文典直訳讀義 [渡辺 松茂]	句読法	断句点 完了点	大句読		小句読
		スウィントン英文典独案内 [島田 ○ 疑]	句点法	段落点			句点 句読点
		容易独修スウィントン氏英文典直訳讀義 [川田 龍洋]	句読法 句読ノ点法	断句点	半重点		句読点 句点 コンマ
35	1891 (明治24)	須田卿氏小英文讀義 [語義・間]	句読法	終結票			コンマ
		独造字徒怪 (全)	符号	Punkt	Semi-Kolon	Doppel-punkt, Kolon	Komma
	1894 (明治27)	教科書独修用新英語学	句点法	段落	半重点	重点	句読
	1895 (明治28)	独造文典 (文語)	符標	点	半重点	重点	Komma
	1897 (明治30)	スーイントン氏小英文典直訳讀義 [元木 貞雄]	句読法	節尾点			句読点
40	1898 (明治31)	邦英文典 (全)	句点法	段落点	半重点	重点	句読点
		新式独造文法詳解			半重点		句読
		英語学大全	文法上ノ記号	段落	半重点	重点	句読
		邦語英文典	句点法	休止点	半重点	二重点	句読点
	1899 (明治32)	英文典教科書	句読法	段落点	半重点	重点	句読点
	1900 (明治33)	新案教科書英語教授初歩	附点法	Period			Comma
45		ネスフィールド氏英文典第三直訳讀解 [畦田 剛]					
	1901 (明治34)	ねすふいーど英文典第三讀義 (校編) [喜内 芳樹]	句点法 句点	段落点	半重点	重点	句読法
		子スフィールド氏第三英文典讀義録 (Vol. IV)	句点法	完尾点	半重点	節点	文切点
		[奈倉 次郎]	点 点符				
		新編英文典問答	点法 句点法	段落点	半重点	重点	句点
50	1901 (明治34)	邦語独造文典	句点法 句点標	Punkt	Semi-kolon	Kolon	Komma
	1902 (明治35)	英語提要	句点法 句点	フルストップ	セミコロ	コロ	コンマ
	1903 (明治36)	受験応用独造作文詳解	句点法				句点
	1904 (明治37)	文法会話作文 英語新編		ピリオット			
	1907 (明治40)	英語字徒怪	Punctuation	Period	Semi-colon	Colon	Comma
55	1911 (明治44)	教科書参考中等英文法通解					

その他の句読記号<?><!><—><()><[]><9><-><, ">の訳名一覧は別の機会に譲る。参考までに主な訳語名を挙げると、<?>疑問点、<!>感嘆点・驚嘆点、<—>横線、<()>括弧、<[]>綴点・副(註)、<9>略点・略字標、<->連字標、<, ">引用標、等である。

軌範』の《頓挫線》である。後者の《頓挫線》は、《横線》という形態的名称の多い中、

横線点ハ組立ニ於テノ欠ケ感傷に於テノ移リ、不意ノ止メ、疑ヒ、或ハ結ヒ付カザル
線リ返シヲ顯ス為メニ用ヒラル、
(大学館蔵書『格賢勃斯英文典直訳』明治4)

という、ダッシュの意味をよくつかんだ訳語である。明治28年『獨逸文典(文論)』においても、Punkt《・》を《点》と訳したそっけなさとは対照的に、これに関しては《思考線》という意味を訳出した名称を用いている。

また、前者の《半段落点》も、前回言及した通り、《半重点》という形態面からの直訳的命名に対し、その意味の本質をよくとらえていて秀逸である。これ以外の《；》に関する訳語のうち、特に興味深いのは、蘭語学より引き継がれた《半節標》(『クワッケンボス氏英文典直訳』明治18)・《半節点》(『スフィールド第三英文典直訳』明治34)である。江戸時代の蘭文典と明治時代の英・独文典における《；》の用法は、全く同じというわけではない。前野良沢の《半節点》は、当時の和蘭語で、「主文」と従属接続詞によって導かれる「従文(副文)」を区切る場合に《；》を用いたが故の命名である¹⁶。英語のセミコロンにはこの用法はない。しかるに何故、蘭語学習の影響が今だ色濃く残っている明治18年の《半節標》はともかく、我国の英文法が新段階に入った明治30年代¹⁷になってから、《半節点》という訳語が突然現れたのであろうか。これには少しく奇異の念を抱かざるを得ない。

<Punctuation>自体の訳語は、まとめると次のようになる。

- | | | | | |
|---------------------|------------------|---------|-----------|--------|
| 1. 点例 | 2. 標式 | 3. 科目 | 4. 句統・句統論 | 5. 点句法 |
| 6. 句点・句点法・句点標・句点ノ記号 | 7. 句読・句読標・句読法 | | | |
| 8. 句読点法・句読ノ点法 | 9. 附点法 | 10. 点書法 | 11. 記点法 | 12. 点法 |
| 13. 符号・符標 | 14. 記号用法・文法上ノ諸記号 | | | |

句読法の定義は<文体ヲ分ツ>というのが普通であるが、逆に、「文を続ける」という意の《句読点》という名称の見られるのが、いかにも日本の解釈で興味を引かれる。序章で述べたように、山田美妙が種々の句読記号を用いたとき「微菌のようだ」と揶揄されたが、或いは句読点は、西洋かぶれした一種の邪魔者、流れるように整然と続く縦書きの日本語の中にできた醜い「染み」か「傷」のように、当時の人々の眼には映ったのかも知れない。

表1を見れば分かるが、二葉亭四迷が「都の花」に『めぐりあい』を連載した明治20～21年頃をピークとした10年ほどの間に、多数の直訳文典が出版され、西洋の《句読法》が紹介されている。この直訳文典の隆盛は偶然起こったのではなく、それなりの理由がある——これについては次章で述べる——のだが、ともあれ、江戸時代の蘭語学習においては、蘭学に従事する者の間でこそ、藤林普山『和蘭語法解』の《○》のように、句読点を用いることが珍しくなかったとはいえ、これが洋語学習を離れて一般にまで流布し始めるのは、洋語学習熱が全国的に蔓延し、学習者の裾野が広がり、そして、文学における言文一致運動の始まった、この明治20年代以降であろう。当時の洋語文典において、種々の句読表記が試行錯誤を重ねつつ考案されていく様子は、前回既に見たとおりである。では、肝心の日本語——訳文のほうはどうか。当時の直訳文典においては、いかなる訳し方が為されたのであろうか。

3. 明治時代の直訳文典における日本語

当時の洋語文典における日本語とはどのようなものであるか。それを考察する前に、ま

ず、言文一致という明治の新文体創造の背景として、その源流となった江戸時代の蘭学者の和蘭語と漢字に対する意識を、杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』より見ておきたい（以下、下線は筆者）。

○大庭雪斎『和蘭文語凡例』安政2（1855）

⇒第1章参照

○小川玄竜『蘭麻知加訓譯』安政3（1856）

漢字簡而字煩、西字簡而文煩。漢字有義一字或兼數言或兼十余言、故數百言之文可以収之於數十字、豈不簡哉。只其字有義每物一一製之豈不煩哉。西字只用二十六字母、聯貫成文豈不簡哉。只其字無義合字而成音合音、而成語加助字於語之首尾以取其義。故數十言之文至累數百字豈不煩哉

○可野 亮『蘭語獨案内』安政3（1856）

夫遠西之文タルヤ字ビ難キニアザレ共唯本邦ノ人ハ其音韻口耳ニ慣レザルガ故ニ読ニク、記シ易カラザルヤウニ覺ユル也然レ共天地間孰レノ国力其人情世態ニ於テ豈異ナルノ理アラナヤ故ニ是ヲ探ルニ事情ヲ以テスルハ最モ容易キ學風ナリ此レヲ漢學ニ比スレバ十ガ一ヨリモ易カルベシ故奈ントナレバ字數ワツカ二十六字ヲ以テシ其辭パノ如キハ本語ヨリ枝葉ヲ分ツガ故ニ理ニ於テ推シタルニ其則アツテ究メ易シ委シクハ余カ著ス所ノ和蘭辭典并対訳和蘭文典等ニ就テ明了スベシ近ク此學ニ入ラント欲セバ先ツ本邦ノアイウエオ五十音ヲ諳誦シテ而後遠西ノ遐字アベセ二十六ノ字体系ヲ能ク諳書シ次ニ約スルニ譬ヘハ真草行ト稱スル如ク變体合セ百三体トナルヲ諳記シ蘭字対訳篇ニ載スル図解ノ如ク二字ヲ合シテ音ヲナシ一音ヨリ二三四音ヲ合口シテ一言トナルガ如キハ一會シ得レハ百事悉ク推シテ知ルベシ

○吉雄權之助『重訂屬文錦囊』(F本) 安政4（1857）

總テ西洋諸國ニハ萬ノ詞ニ九ツノ品アリケリコハ皇御國ノ詞ニモヤガテアンメレド知ル人イト希ニナンアリケルサヘツルヤ^{タラシム}唐山^{タラシム}人ハカ、ル定マリヲバ知ラズ。サテ其九ツノ詞ヲツラネ合スルニ五種ノ法アリテ少モ違ヒヌレバ言ノ葉整ラザルノミナラズ書キ出ル文ノアヤマモ言ヒ出ル詞ノ心ヲモ失ヒツルモノゾ此五種ノ法ハカキ綴レル文ノ詞ニハ更ニモ言ハズ言出ル詞ニモ自ラ調ヒテ違ハルフシハ^{タラシム}義^{タラシム}無リケリコハ清國ノ如クニ雅言ト俗言トノ二道ハ無キ習ハシナレバナリサル故ニ文読學ヲ始ニハ Saamen Spraakト言テ人言ヒサマヲ書ケル者ヲ學ビツレバ文モ歌モ同ジカ、ルヲイマダシキ輩ハ言フニ^{タラシム}社^{タラシム}カノ五ノ法ハアリケン。文ヨムニハ必シモサシモアラズ唯ソノ言葉ノ趣ニ隨ヒテ^{タラシム}兔^{タラシム}ニモ角ニモ物スベキワザナリト言リコハイミチクゾ心得ツル^{タラシム}蜜^{タラシム}夷^{タラシム}心アル人ゾカシ

○柳川春三『洋学指針・蘭学部』安政4（1857）成立、明治1（1868）出版

近世至累居先生首唱古学鈴屋先生隨而和之群賢並出繼紹興廢於是乎雅言得復通矣若夫唐山之文活字之用頗欠分明雖有助字不能晰既往之与将来故其解古經所見各異爭議紛出蓋先世制數萬之字徒令後人勞耳遠西諸國制字只為聲音之標其体^{タラシム}少而其用浩^{タラシム}瀚^{タラシム}輯合之便活用之機殆不讓于我是故西語之式可以圖示漢文之率則不能也吾^{タラシム}識^{タラシム}蘭文範將公于世先刻此圖以為嚆矢今之從事洋學者唯眩于異言之夥不仰言靈之德与二師之惠吾^{タラシム}憾^{タラシム}之因弁一言如是

四番目に引用した吉雄權之助は、実質的にシーボルトの「鳴滝塾」を運営した人物であ

る。これらの言からは、中国を離れ西洋に傾斜していく幕末の日本の姿が手に取るように読み取れる。そして、和蘭語がく清国ノ如ク雅言ト俗言トノ二道無キ習ハシ>であることへのこの認識こそが、明治になって言文一致運動を招来せしめるのである。

○生駒 著 譯述『文法詳解ビネヲ氏英文典獨案内』『自序」、積善館 明治19(1886)

夫レ文ハ言ヲ写セルモノナリ、辞ハ文ノ本有タルモノナリ、言文固ヨリ一致セザルベカラザル也、…抑我日本ハ固有ノ国語有リ、上世既ニ此言辞ニ依テ以テ要ヲ済ス、即チ欧亜ト同シク言辞ノ州国タリ、故ニ邦俗未ダ盡ク其法ヲ学フ事ヲ為サスト雖モ、夫ノ体言、用言、冠辞、接続、断絶、拗反、抑揚ノ諸格ハ、自然ニ存立シテ大差有ルコトヲ見ズ、然ニ興音始テ来リ、漢音次テ入リ、文章漸ク其面目ヲ革ムルノ端ヲ為シ、爾来言辞ハ以テ文ノ根本ニ違ク、文ハ乃チ言辞ノ緊要ニ薄ク、遂ニ方今ノ俗ヲシテ、全ク言文ニ途アルモノ、如ク想ハシムルニ至レリ、是我国今日ノ風言辞ハ、現ニ今ヲ言テ、而シテ文章ハ千年ノ古調ヲ須フルニ由テ徹スベシ、豈過誤ノ太甚シキモノト謂ハサル可ケンヤ、泰西諸国ハ然ラス、言辞即チ文ニシテ、文即チ言辞ナリ、然モ言辞ヲシテ其自然ニ任セシムレバ、鄙野ナルヲ免カレサルヲアリ、是レ西洋諸国ニ文法ノ必要ナル所ナリ、此書ハビネヲ氏著述ニシテ、英文典中尤モ正確ノ名ヲ博シタルモノナリ、我邦英語ヲ学フモノ、為ニ直譯シ、訓古ヲ須^ニ井^テ之ヲ公ニス、蓋シ言文ノ一致、章句ノ活用ヲ見^ニヲ希図スルニ出タルノミ、請フ看幸ニ之ヲ了セヨ

○石川辰之助著『通俗英文典』『序」、博文館 明治31(1898)

英語は元来言文一致なれば此書に授くる所を以て会話の用に供し得べく、且つ英語の初歩は日常の会話を以て授くるの外に途無きものなり。

ところが、欧文を知る第一の手段である洋語文典の日本語は、意味の全く通じない、およそ日本語とは言えない代物であることが少なくなかったのである。

注意第一、形作、夫レハ動詞若シモ夫レガ唯タ名ツケラル、トキニ持ツ所ノ《形作》夫レヲ人ガ夫レ故ニ又名乗法ト名ツクル所ノ《形作》ガ彼レノ意味ノ普通ノワケデ(彼ガ羅甸ニ於テ不定法委シク云エバ不定ナル説話法ト名ツケラル、ハ夫レ故ナリ)説話法トシテ経験サレ能ハヌ)彼レガ或ハ首言或ハ適言トシテ立ツ、夫レ故ニ名詞ノ本体ヲ持ツ故ニ我等ガ彼レヲ不定法ト名ツク

(多賀貫一郎譯『シェーフェル文典直譯』競美堂 明治13[1880])

註解 動詞ノ文法上ノ形作りヲ考フル可ク前立ツ処テ動詞ノ如キ言葉或ハ動詞上ノ夫レハ英動詞ノ形作りニ於テ多ク用イラル、処ノニツノ種類ヲ注意スル可ク便利デアアルデアロウ (田中達三郎譯『須因頓氏大文典解釈』同盟書肆、明治21[1978])

上の例は獨逸語の、下は英語のInfinitiveの説明箇所である。後者の田中達三郎訳の英文典には、使用者の手で本文第一ページめの余白に、

田中達三郎善ク承ハレヨ貴様ハ此ノ口ヲ学ブモノハ必ズ此書左右ニ置クベシトハ何等ノ事ゾスカ、ル直譯の劣文ヲ次テ自分ニ未ダ解セザルニ世ニ公ニ出ストハ貴様ノ心底耻カシカラズや前^(ママ)譯アル大慢序ヲ吐キタルハ悪アリシト世人ニ大ニ謝セヨ

という書き込みがなされており、不可解な訳文に対する利用者の苛立ちの感情がストレ

トに伝わってくる。明治も終わりの42年になってさえ、＜怪譯奇語で固めた獨案内の跋扈＞¹⁸という声が聞かれるほど、この種の難解な文法書は後を立たなかったのである。

このような難解さの主な原因は、当時の文法書の題名にもなっているところの「直譯」という翻訳スタイルにある。前述の『文法詳解ビネヲ氏英文典獨案内』の「自序」に、＜我邦英語ヲ学フモノ、為ニ直譯シ、訓詰ヲ須キテ之ヲ公ニス＞とあったが、いかに勉学上の便宜のためとは言え、欧文に合わせて直訳に徹した余り、文意の通らない不自然な日本語だらけになってしまったのが、明治時代の直訳文典なのであった。

日本における語学々習のテキストは、およそ次のような歩みを辿る。

1. 本国直輸入の原典

2. 直譯文典

3. 邦語文典

原書の文典が用いられた時期については、太田雄三『英語と日本人』第二章（講談社学術文庫、1995）に詳しい。明治の始めは、＜西洋的学問の必要が痛切に感じられたが、はじめはそれを教えることの出来る日本人がほとんどいなかったで、高等教育はほとんどすべて外国人教師に頼らなければならない時期＞であった。勢い、用いる教科書も外国のものをそのまま使用する。あの内村鑑三、新渡戸稲造らが、＜現在の小学校四年くらいの年齢から一日中外国語ばかりやっているような官立の学校＞で基礎教育を、次いで＜明治八年ごろからほぼ十年弱の期間＞に高等教育を受けたが、彼らは、欧米人教師も驚くその語学力と引き換えに、日本語のほうで、日々の読書や手紙のやりとりでさえも不自由することになってしまう。太田氏は述べている、＜西洋文明に対する熱狂のあまり、自国の伝統の価値を極端に軽んじる風潮のあった明治初年においては、自国語や自国語を通しての文化を犠牲にしてまで、欧語を重視した教育が未来のエリートに対して行なわれた＞¹⁹と。

この明治4～5年頃に端を発する時期を外国語学習に狂奔した第一期とすると、その第二期は、いわゆる「鹿鳴館時代」である。再び太田氏によると、

欧化主義の象徴ともいべき上流の内外人のための社交クラブ、鹿鳴館が出来たのは明治十六（一八八三）年である、欧化主義時代がピークに達した明治一八、九（一八八五、六）年頃になると英語熱もまた白熱し、「丁稚小僧は其の唇頭より端唄都々逸の代りに、オール・ライト、グッド・バイ等、生啗ぢりの洋語を漏らし、英学先生は鞍馬山の天狗の如く……手腕を伸べて、全国中を翱翔し」（植村正久「過去三十年宗教上の回顧」『植村正久と其の時代』第五卷）

といった有様になった²⁰。そして、鹿鳴館落成のこの年から、まさに明治の直訳文典の隆盛は始まるのである。

直譯本の流行

英文を義得せんとする初学者用として、リーダーの直譯本の発行、一時に流行せり。明治16年4月4日の「絵入自由」に『ウヰルソン氏第一読本直譯、右はウヰルソン第一リードリの譯文（錦織精之譯）に英音のかなを冠し、一二三を以て返り點を付したる書にして云々』などの広告を見るは、其一斑なり。

小便小僧横文字を雪の朝

桂月²¹

「直訳文典」というのは、要するに、洋文を解さない初心者が独力で原書の文法書を学習できるよう考え出されたもので、＜できる限り逐語訳をして、原文との距離をなくして

□…仏文典 ★…独文典 ●…英文典

		1868~77	1878~82	1883~87	1888~92	1893~97	1898~02	1903~12
		明治1 ~明治10	明治11 ~明治15	明治16 ~明治20	明治21 ~明治25	明治26 ~明治30	明治31 ~明治35	明治36 ~明治45
Peyton	● (文化 8)							
Murray	● (大塚 11)							
Sommer				□□				
Kaderly		★						
Schäfer			★	★★★★		★		
Pineo		●●		●●●●●●●●				
Quacken- bos		●●●		●●●●●	●●			
Brown				●●●●●●●●	●●			
Swinton				●●●●●●	●●●●●●●● ●●●●●●●●	●●●		
Dixon				●				
Cox				●				
Ollendorf					●			
Nesfield							●●●●●●●●	
主な 邦語文典		(水) ●●●	●	★★★★★ ●●●●●●●● ●●	★ ●●●	★★★★ ●●●●●●●● ●●●	★★★ □ ●●●●	★★★★★★★ ●●●●●●●● ●●

表2. 著者別に見た明治期の直訳文典の出版数 (国会図書館所蔵本による)

訳出する方法>¹²である。蘭語学習が全国的に普及した安政年間頃に始まり、明治に引き継がれ、前述のとおり明治20年頃にそのピークを迎えている。

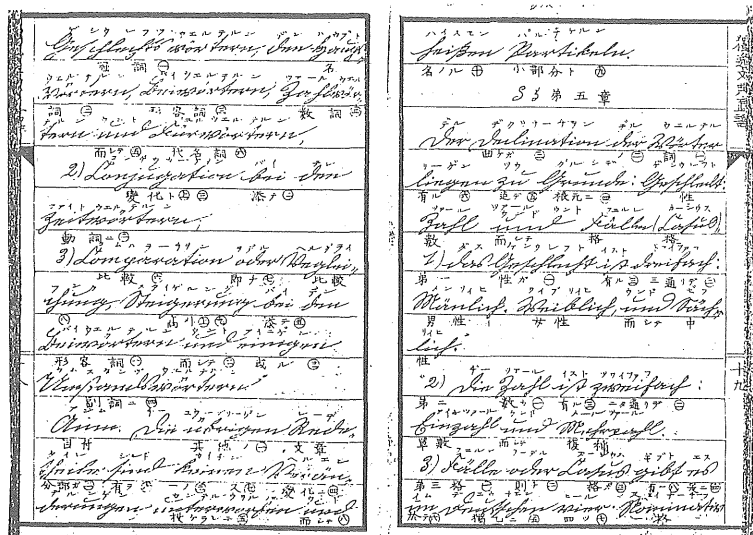
この「直訳」という方式にはふたつの大きな特徴がある。即ち、

1. 漢文訓読方式に基づく徹底した逐語訳
2. 訳語の定型化

である。第一の漢文訓読方式というのは、上述の「直譯本の流行」の箇所であつて「一二三を以て返り點を付したる書」とあつたように、日本語と語順の異なる欧文に、漢文を読み下す時の句読法を用いて読み順を附することである。これについては、杉本つとむ氏の『江戸時代蘭語学の成立とその展開』Ⅱに詳しいが、もとは『解体新書』で有名な蘭化・前野良沢の創始した方法で、俗に「蘭化亭方式」と呼ばれており、明治期の文典でも盛んに用いられている。

○渡辺五一郎譯『ピネヲ氏原書英文典獨案内』東生氏蔵版 明治16(1883)

Art. 28. ^{ビネゾ} because ^{ミスト} it is ^{イムポータント} the most important ^{ワフワード} word ^{イン} in ^ザ the
 章 主入 如所トナレバ、故ニ 夫ハ アル 尤モ 大効ナル 語デ 夫
 language ^{エス} as ^{ゼー} there ^{ケン} can ^{ビー} be ^{ノー} no ^{コンプリート} complete ^{センテンス} sentence ^{ウィヤウト} without ^{イフ} if. ^夫
 言語ニ 通り ソコニ 能ハ アリ ス 十分ナル 文句ガ ナシニ 夫



しかし、実際にこの数字を追ってもらえば分かるのだが、この読み順の番号はまことに読みにくいのである。従属節がある場合など、次の番号が遠く飛んで離れてしまうので、文法の未熟な初学者は洋文がいかなる法則で以て配列され、次がどこへ続くのかが理解できず、欧文の配語法がちんぶんかんぶんになリかねないであろう。それ故、次のような批判が出てきて、「文法」というものが口やかましく言われる原因になったのだらうと思われる。

それから次に一つ注意しなければならぬ大切な事といふのは、従来の学生は、文法は丸で目茶々々で、当り構はずに譯を付けたものだから、文章に誤りがあっても分らず、無暗みに譯をさへ付ければ善いとしたものだが、是れが第一の根本的誤りである。…兎角文法でふものは、乾燥無味なものだから、之を放任して顧みないものがあるが、其結果として譯読上に一大障害を与えるものである。…

(蘆川忠雄著『新案英語研究活法』大阪・浜本書店 明治36)

「文法偏重」とは現代の日本の語学教育に対する非難の最たるものであるが、かつては文法に拘泥しなかった時代があったのである。なぜなら、明治初年は、未来のエリートに対する教育は十歳頃からすべて欧米人によって洋語でなされたので、「習うより慣れる」式で行けたからである。しかし、そのような時代が明治14～15年頃までに終わり、日本人が日本語によって教授し始めると、そうも言っていられなくなる。明治16年に始まる直訳文典は、教育用語が英語から邦語に切り替わり、外国人教師の数が激減した時期に、洋語学習ブームとともに始まった。そして、＜一、二、三＞＜上、下＞等の句読に従えば、文法を知らずとも、良師を得ずとも、とにかく意味をとることだけはできたのである。

この「訓読法」に加えて、直訳文典の第2の特徴である「訳語の定型化」が進行したことにより、洋語文典はいよいよ難解極まるものになってしまうのである。「訳語の定型化」

表3. 明治時代の三過去及び不定法の訳語

年 号	書 名	半過去 i have d	過去 have d	大過去 had d	不定法現在 to d	不定法過去 to have d
1805 (文化2)	四法語時対訳	字ぶ、字びき	字びつ	字びつ、字びき		
1811 (文化8)	和蘭語法解	持ちき	持ちき	持てりき	打ツ	愛セラレタル
1840 (天保11)	英文鑑	愛セシ	愛セリ	愛シタリシ		
1857 (明治4)	和蘭文典字類 (後編)	読ミシ	読ンタ			
1871 (明治4)	英文学数字	愛セシ	愛シタ	愛シタ		
1883 (明治16)	克爾文典直訳	書キシ	書イタ	書イタリキ	書ク可ク	書イタ可ク
	ピネツ氏原著英文典發案内 (渡辺五一郎)	愛セシ	愛シタ	愛シタリキ		
	英語教學便法	持チシ	持タ	持タリシ	持ツベク	持タベク
1884 (明治17)	ブラウン氏英文典直訳 (中西 龍)	愛セシ	愛シタ	愛シタリキ	愛スルベク	愛シタベク
	文典和解英文指針	見シ	見タリ	見タリキ	見ルベク	見タルベク
1885 (明治18)	クワッケンボス氏英文典發案内 (高宮 直太)	アリシ	アリタ	アリタリシ		
1886 (明治19)	クワッケンボス氏英文典直訳 (栗野 忠雄)	愛セシ	愛シタ	愛シタリキ		
	ブラウン氏英文典直訳 (源 龍紀)	愛セシ	愛シタ	愛シタリキ	愛スルベク	愛シタベク
	ピネツ氏英文典数字 (玉井 増三郎)	愛セシ			愛スルベク	
	ブラウン氏英文典訳義 (沢田星造)	愛せし	愛した	愛したるし	愛するべく	愛したるべく
1887 (明治20)	ソネルム氏英文典数字 (中村 秀徳)	持チシ	持ツタ	持タリシ	持ツ	持ツタ
	ソネルム氏英文典直訳 (平山 直道)	愛セシ	愛シタ	愛シタリシ		
	和解纂註英文軌範	有リシ	有リタリ	有リタリキ		
	容易發修英文典直訳	愛セシ	愛シタ	愛シタリキ	愛スルベク	愛シタベク
	スウモントン氏英文典直訳 (蓋田 東雄)	愛セシ			愛スベク	愛シタベク
	クワッケンボス氏英文典直訳 (山本 英太郎)	アリシ	アリタ	アリタリシ		
		愛セシ	愛シタ	愛シタリシ	愛スルベク	愛シタルベク
	クワッケンボス氏英文典直訳 (水沢 郁)	愛セシ	愛シタ	愛シタ	愛スル可ク	愛シタ可ク
	ピネツ氏英文典發案内 (佐藤建治)	アリシ	アリタ	アリタリキ	アル可ク	アリタ可ク
1888 (明治21)	クワッケンボス氏英文典發案内 (外川秀二郎)	愛セシ	愛シタ	愛シタリシ	愛スル	愛シタ
		アリシ	アリタ	アリタリシ		
	スウモントン氏英文典直 (太田 二郎)	愛セシ	愛シテアル	愛シタ/愛シタリキ	愛スベク	愛シテアルベク
		(Part.) 愛シツ、/愛シテアリツ ; (Gerund) 愛スル/愛シテアル				
	須田頼氏大文典解釈 (田中 達三郎)	愛セシ	愛シタ	愛セシ	愛スベク	愛シタベク
	スウモントン氏英文典直訳 (渡辺 松茂)	愛セシ	愛シタ	愛シタリシ	愛スベク	愛シタベク
1889 (明治22)	スウモントン氏英文典直訳 (榊野 乙弥)	愛セシ	愛シタ	愛サレタ (マ)	愛スル可ク	愛シタ可ク
	教逸文典略訳解 (田中 康二)	アリシ	アツタ	アツタリシ		
	須田頼氏大文典譯義 (山形 閑)	アリシ	アツタ	アツタリシ	アル	アツタ
		愛セシ	愛シタ	愛シタリシ	愛スル	愛シタ
	須田頼氏大文典譯義 (平井 広五郎)	有リシ	有ツタ	有ツタリシ		
	須田頼氏小文典譯義 (湯浅 潤)	愛セシ	愛シタ	愛シタリキ	愛スル	愛シタ
1890 (明治23)	スウモントン氏英文典直訳譯義 (渡辺 松茂)	愛セシ	愛シタ	愛シタリシ	愛スベク	愛シタベク
1894 (明治27)	教科及發習用新英語字	有チシ	有チタ	有チタ	有ツ ()	有チタ ()

年 号	書 名	半過去 I loved	過 去 have loved	大過去 had loved	不定法現在 to love	不定法過去 to have
1897 (明治30)	スーイントン小文典直訳意解 (元本 貞蔵)	愛セリ	愛シタ	愛シタリキ	愛ス	愛シタ
1898 (明治31)	英語学大全	持ツタ 持テ居ツタ	持ツタ 持テ居ツタ	既ニ持ツタ 既ニ持テ居ツタ		
1899 (明治32)	教科書新式英語学教修	持チシ 持テ居タ アリシ 愛セシ	持テ居タ アツタ 愛シタ	持タリキ 持テ居タ ₁ ガアツタ アツタリキ 既ニアツタ 愛シタリキ	アルコト 愛スル ₁	アリタルコト 愛シタ ₁
1900 (明治33)	子スフィールド氏第三英文典講義録 (奈倉)	愛しき	愛せり	愛したりき	送る	送れる
	子スフィールド氏第二英文典講義 (鶴田)	愛セリ	愛シタリ	愛シタリキ		
	ねすふいーど英文典第二教案内 (栗野)	愛セシ	愛シタ	愛シタリシ	送ル	送ツタ
1901 (明治34)	文法大直 (全)	読んだ	読み了 ₁ った	読んでしまった		
1908 (明治41)	中学英文法講義	愛シタ アツタ 持ツタ	愛シタ アツタ 持ツタ	既ニ愛シタ 既ニアツタ 既ニ持ツタ	愛スル ₁ アルコト	愛シタ ₁ アツタコト

というのは、「かくかくの場合はかく訳す」というやり方をステレオタイプに一定化することである。これについては別論でも多少触れるところがあったが、Conjugation (動詞の活用) を例にとれば、「訳語の定型化」というのは表3のようなものである。そして、このような「定型」に従って Conjugation 全体を邦訳すると、次のようになる。

○ love ナル動詞之変法 (戸代光太『容易獨修英文典直訳』大倉書店、明治20 [下線は筆者])

主要ナル部分) 現在 love 愛スル 過去 loved 愛セシ
半過去分詞 loving 愛シツ₁ 過去分詞 loved 愛シタル

直接法) 現在 ; Thou lovest 汝ハ愛スル
半過去 ; Thou lovedst 愛セシ
過 去 ; Thou hast loved 愛シタ
大過去 ; Thou hadst loved 愛シタリキ
第一未来 ; Thou will love 愛スルデアロウ
第二未来 ; Thou will have loved 愛シタデアロウ
成就法) 現在 ; Thou mayst love 愛シ得ル
半過去 ; Thou mightst love 愛シ得シ
過 去 ; Thou mayst have loved 愛シ得タ
大過去 ; Thou mightst have loved 愛シ得タリキ
接続法) 現在 ; If thou love 若シモ汝ガ愛スルナラバ
半過去 ; If thou loved 若シモ汝ガ愛セシナラバ

命令法) love (thou) 愛セヨ

分 詞) 半過去 loving 愛シツ₁ ; 過去 loved 愛サレタル ; 大過去 having loved 愛シタ₂ズ

不定法) 現在ノ時 To love 愛スルベク ; 過去ノ時 To have loved 愛シタ₂ベク

この《変法》における《直接法》の6時制の訳し方は、英・独を問わず、当時の洋語文

典にほぼ共通のものである。《現在》の《愛スル》、《半過去》の《愛セシ》、《過去》の《愛シタ》¹³に従って、接続法現在及び過去がこれと同様に訳され、不定法過去に至っては《愛シタベク》(これは一体どういう意味であろうか)となっている。このステレオタイプな訳語のため、結果、接続法半過去はその意味用法までが過去だと誤解され、不定法過去は自然な日本語でなくなってしまったのである。

しかし、それ以上に困ったのは、直訳文典の原典が本国直輸入のものなので日本人に合わないということであった。よって、消化不良による〈隔靴搔痒ノ憾〉を失くすべく切に望まれたのが、日本人が、日本人のために、日本語で書いた「《邦語》文典」である。

○『英文法教科書』「自序」、共益商社著・蔵版 明治29(1896)

本書ハ我邦文ヲ以テ英文法ヲ講述シタルモノナリ謂フニ我邦文ヲ以テ之ヲ為スハ大ニ修学者ノ便宜ヲ得ルノ言ヲ須タザルナリ是レ乃チ外国ニテ他國ノ文法ヲ講ズルニ自國ノ言語ヲ以テ之ヲ為ス所以ニシテ本書ハ全ク此体裁ニ則リ文法用語ヲ除クノ外ハ全ク我邦文ヲ以テセリ然レモ其説明ノ如キハ極メテ簡明ヲ尚ベリ是レ其講授ノ際十分ニ之ガ説明ノ余地ヲ造為シタルモノトス……之ヲ要スルニ現今我國學術ノ進歩ハ遂ニ諸般ノ学科ヲ修ムルニ概シ我邦文ヲ以テ述作セラレタルモノヲ以テ為スニ至レリ然ルニ獨リ此英文法一科ノミハ猶其旧法ニ率由シ我邦語ヲ以テスルモノヲ用ヅルヲ鮮シ為ニ修学者ヲシテ徒ニ英語修學ノ困難ナルヲ觀ル而已ニシテ絶テ之ヲ迅速ニ精確ニ修得スルノ便法有ルヲ知ラザラシム是レ實ニ著者ガ自己ノ○劣ヲ顧ミズ此書ヲ公ニ為スニ至リシ所以ナリ

○大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎合著『獨逸文法教科書』「凡例」、獨逸学協会出版部蔵版、明治27(1894)

2. 從來我邦二行ハル、獨逸語ノ文法書ハ大率獨逸國學生ノ為ニ著述シタルモノナレハ編纂ノ次第説明ノ方法等本邦ノ學生ニ適セザルコト固トヨリ明ナリ本書ハ此缺點ヲ補ハシカニ獨逸文法中最モ必須ナル教科ヲ撰擇シ専ラ教授法上ノ原則ニ基キ易ヨリ難ニ入り簡ヨリ繁ニ及ボシ邦語ヲ以テ簡明ニ説明シタリ故ニ其系統ノ如キモ從來ノ文法書ト異ナル所頗ル多シ

表1には明治31年に2冊の邦語英文典が見られるが、独・仏語においても、明治34年に『邦語獨逸文典』(青木昌吉編、博文館)、『邦語仏蘭西文典』(松井知時編、博文館)が出ている。かくして、明治30年になる頃から、〈直譯なれば其義もよく通ぜず、初学者のために文法を知らしめ、たやすく譯読をなす助とはなら〉¹⁴なくもない日本語が、洋語文典に見られるようになる。が、実を言えば、邦人の手になる邦語文典は、これ以前にも若干書かれてはいたのである。洋語一辺倒による教育の最中の明治4年に『洋学指針』、明治17年に『文典和解英文指針』、明治20年に、冒頭に挙げた、坪内逍遙の序文を持つ『和解纂註英文軌範』及び『獨文組立法』等、漢文臭があつて固いが、一応読むに耐え得る日本語で書かれた邦語文典が編まれている。特に明治22年に長崎で出版された『和譯英小文典』は、Conjugationの表示法など、〈僻地良師友ニ乏シ〉という凡例の言葉が皮肉に聞こえるほど、江戸時代以来、外国語学習の中心であつた土地の面目躍如たる内容である。しかしこの頃は、直訳の易きに流るるが故の文法咀嚼の不備と口語文未成熟のため、邦語文典は十分育たなかつたのである。『邦語○○文典』というタイトルは伊達ではない。《邦語》というのは、横文字ではなく日本語で書かれてあるので誰でも読んで理解できる、即ち<其

意ヲ解スルニ苦ミ殆ト文法ヲ知ラズ(中略)遂ニ倦テ復習セサルニ至ル>¹⁶ 心配がないということの意味する、当時の文典の最大のセールスポイントである。

二葉亭も、若き日の洋語学習の際、このような難解な日本語で書かれた直訳文典を手にしたことがあったのであろうか。そして、

○私ガ書生デアリタ

○彼ガ活シ能ハヌ

○フ란ツ帝ガ已ニ二日後ニ戦場ノ上ノ一ツノ篝火ノ傍ニナポレオント一所ニ来リシ

○勉強ナル職人ガ彼レノ巧ナル頭ノ側ニ仕事スル¹⁷

のような、<漢文ノ読方即チ直譯法ノ習癖>¹⁷に倣った、<從來多クハ直譯体ニ流ル、ヲ以テ活用ノオヲ養成スルコト能ハ>¹⁸ざる和文によって、文法を学び、作文練習を行なったのであろうか。

このような日本語とも言えぬ日本語(或いは全くの原語のみ)で明治の人々が西洋語を学んだことを踏まえて二葉亭の『めぐりあひ』を見ると、言文一致体であれだけの文章を綴ることの労苦がつくづく思い遣られるのである。言うなれば、明治20年当時は、口語によるコンポジションが確立していなかったのである。〈あざやかな大粒の星は黒ずむだ蒼空にきらつき切つてゐた〉のような表現に接すると、その新奇さに違和感さえ感ずるが、二葉亭は、あまりにも鮮やかに皎々と輝く星々を新文体でいかに形容すべきか、どれほど腐心したことであろうか。しかし、言文一致体でかくかくの表現ができるものなのかどうかという問いに対する返答は、日本語による自然な表現を犠牲にしていた当時の洋語学習からは得られなかったのである。

4. 蘭訳英文典『和蘭語法解』とその訳文

では、日本における翻訳文典のルーツは何か。そして、そこでは如何なる日本語の表現がなされたのであろうか。

本邦における本格的な邦訳蘭文典は、文化8(1811)年頃、馬場左十郎貞由によって訳出された『和蘭文学問答(西文規範)』である。

<凡例>

一、此編ハ和蘭ノ *kornelis van der palm* ト云エル人ノ著述ニシテ題号ヲ *nederduitsche Spraak künst voor de jungd* ト云フ此ヲ訳^(マダ)ヌレハ幼学須知文家必用ト云ハシナカキ義也訳成テ後暫ク此ヲ西文規範ト仮題ス原本板行ノ年ハ彼曆数一千七百七十四年也安永三年甲午ニ当ル¹⁹

しかし、この書はくいかなる事情によるのか、ついに刊行が実現しなかった>²⁰、これに代わるものとして同年頃訳出されたのが、藤林普山『和蘭語法解』である(実録の出版は12年頃)。従って、出版されて広く巷間に流布した翻訳文典としては、この『和蘭語法解』こそ、その最初のものと言えるであろう。ここにおいて如何なる日本語訳が、例えば動詞の時制・仮定法などで為されているか、大いに興味をそそられる。ところが、藤林普山のこの訳述書は、その表題こそ和蘭語の文法書となっているが、その内容は実は英文典ではないか、即ち和蘭語に訳された英語の文法書ではないか、と考えられるのである。何故かと言うと、和蘭語にはなくて英語にのみ存在する文法事項が、この『和蘭語法解』には見られるからである。そこで、訳文考察の前に、(1)その著者、及び該書における英文法に特徴的な事項

である(2)許可法、(3)缺助言の3点について吟味してみることにする。

4.1. 底本について(『和蘭語法辭』の原本は国会図書館蔵の和綴本3冊を使用する)

(1) 著者

普山が原典としたのは<百乙東>著すところの<ス普羅加公斯多>である。

(前略) 普山藤先生。最嗜此学。訳書数十部。殫思精煉遂究其蘊奥。乃本彼邦百乙東氏及。数家之斯普羅加公斯多。此謂語法引類挙例加自得之説。著一書題曰和蘭語法解…²¹

この人物について、杉本つとむ氏は、

国会図書館に所蔵されている旧幕府所蔵の蘭書によって、<P--->と姓をもつそれらしい著者を調べてみたが、ペートンなる人物は見当たらない、ただ„Spraakunst“であるから、その点からも調査したが、むしろウェイランドが、P. ウェランドで、その„Petrus“を姓のペートンなどと誤解したのではないかと推測してみた²²。

と述べられているが、この<百乙東>というのは、Sewelの文法書に名に見える<PEYTON>のことではなからうか。

Sewelの文法書とは、P. Marinと並んで江戸時代の蘭学者達が好んで使用したもので、藤林普山も《助言》(現代の『助蘭語』)の箇所、

按スルニセウエル氏著ス所ノ語典ニ zouden ㄱ onderstellende toekomstelijc 牀ス、…

のように言及している。江戸幕府旧蔵洋書中には、Sewelの蘭英・英蘭辞書である

Volkomen Woordenboek de nederduitsche en Engelsche Taalen. / A compleat Dictionary Dutch and English, To which is added a GRAMMAR, for both Languages. Te Amsterdam, 1708/1746/1766.

があり、これに附された英文典„Vertoog wegens de Engelsche Spraakkunst“に<Heer PEYTON>の名前が見える(序文2/本文5箇所)、そして Sewelは、この簡潔な英文典の記述を<Heer PEYTON>の文法書を参照して書いているのである。

○ De Heer PEYTON telt, in zyne Spraakkunst, onder deeze Woorden meede op : Almond, Handmaid, … (p. 3)

バイトン氏は彼の文法書において Almond, Handmaid もこれらの言葉の中に加えている。[抜音の d について]

○ In de Verhandeling derzelven, zal ik wederom den Heer PEYTON volgen, dien ik in deezen niet kan verbeteren. (p. 20)

この説明は、再びバイトン氏に従うことにしよう、私には彼以上にうまくできないので、[代名詞について]

(2) 許可法

普山は Modus(語法: 蘭 Wijze; 英 mood 又 mode)として次の9法を挙げている。

○ 活言法「ウェイセン。デル。ウェルクウヲールデン」

1. 直説法「アーントーネンデ。ウェイセ」

2. 許可法「フルモーゲンデ。ウェイセ」

3. 附説法「アーンフーゲンデ。ウェイセ」「ランデルフーゲレイケ。ウェイセ」「ウェンセンデ。ウェイセ」「エールステ^{第一}フルビンデンデ。ウェイセ」

4. 第二附説法「テウェーデ。フルビンデンデ。ウェイセ」

● 用語左肩の数字は Modus の列挙順位を示す。 ● (蘭) (英) (仏) は何語の文法書であるかを示す。

— 29 —

表5. 英語の原書における Mood の構成

年号	著 者	Indica- tive	Impera- tive	Opta- tive	Poten- tial	Subjunc- tive	Infini- tive	Con- ditional
4c.	Donatus	m o d u s な し						
5c.	Priscianus	1. 叙事法 明示法	2. 命令法	3. 祈願法		4. 假定法	5. 不定法	
ca. 1325	思弁文典	1. Ind.	2. Imper.	3. Opt.		4. Conj.	5. Inf.	
1527	Lily-Colet (初版) (補英)	1. Ind.	2. Imper.	3. Opt.		4. Conl.	5. Inf.	
1549	Lily-Colet	1. Ind.	2. Imper.	3. Opt.	4. Pot.	5. Subj.	6. Inf.	
1586	Bullockar	1. Ind.	2. Imper.	3. Opt.		4. Conj.	5. Inf.	
1594	P. Gr.	m o o d な し						
1617	Hume	言 及 は ある が 舊 語 な し						
1621	Gill	1. Ind.	2. Imper.		3. Pot.		4. Inf.	
1634	Butler	1. Ind.	2. Imper.		3. Pot.		4. Inf.	
1640	B. Jonson	m o o d な し						
1654	Wharton	1. Ind.	2. Imper.		3. Pot.		4. Inf.	
1692	Arckin	1. Ind.	2. Imper.	4. Opt.		3. Subj.	5. Inf.	
1688	Miege	1. Ind.	2. Imper.			3. Subj.	4. Inf.	
1690	Clare	1. Ind.	2. Imper.			3. Conj.	4. inf.	
1708	Sewel	1. Toon.	2. Gebied.	3. Wensch.			4. Onbep.	
1735	Collyer	m o o d な し						
1745	Kirkby	3. Ind. Declarative	2. Imper.		4. Pot.		1. Inf.	
1754	Cough	m o o d な し						
1761	White	1. Ind.	2. Imper.		4. Pot.	2. Subj.	4. Inf.	
		3. Elective 4. Determinative 6. Obligative 7. Compulsive 8. Participle						
1771	Fenning	1. Ind.	4. Imper.		3. Pot.	2. Subj.	5. Inf.	
1777	Harrison	1. Ind.	2. Imper.			3. Subj.	4. Inf.	
1784	Webster	2. Ind.	3. Imper.		4. Pot.		1. Inf.	
1795	Murray	1. Ind.	2. Imper.		3. Pot.	4. Subj.	5. Inf.	
1801	Locke	Aant.	Gebied.			Byvoeg.	Onbep.	
1811	和蘭語法解	1. 直説法	5. 敬令法		2. 許可法	3. 願説法	6. 不定法	
		4. 第二附説法 7. 疑問法 8. 不敬法 9. 不有法						
1845	Hamelberg	2. Ind.	4. Imper.		5. Pot.	6. Subj.	1. Inf.	3. Condit.
1852	Murray	1. Ind. Aant.	2. Imper. Gebied.		3. Pot. v. c. more end	4. Subj. Aant.	5. Inf. Onbep.	
1854	Beek	2. Ind. Aant.	3. Imper. Gebied.			4. Byvoeg. Subj.	5. Onbep. Inf.	
1855	Gerdes	2. Aant. Ind.	3. Gebied. Imper.			4. Byvoeg. Subj.	1. Onbep. Inf.	
1855	Lloyd	2. Ind. Aant.	3. Imper. Gebied.			4. Subj. Aant.	1. Inf. Onbep.	
1861	Murray	1. Ind.	2. Imper.		3. Pot.	4. Subj.	5. Inf.	
1867	Quackenbos	1. Ind.	4. Imper.		3. Pot.	3. Subj.	5. Inf.	
1870	Pineo	1. Ind.	4. imper.		2. pot.	3. subj.	5. inf.	6. parti- cipial
1876	Swinton	1. Ind.	4. imper.		2. Pot.	3. Subj.	5. Inf.	

5. 使令法「ゲビーデンド。ウェイセ」
6. 不定法「ランベバールデ。ウェイセ」
7. 疑問法「フラーゲンデ。ウェイセ」：a. 疑問不無法 b. 疑問不有法
8. 不無法「ベヘスチゲンデ。ウェイセ」
9. 不有法「ラントケンネンデ。ウェイセ」

和蘭語の Modus は、普通 1. 3. 5. 6. の四法である。4. の《第二附說法》とは、例文を見る限りでは《条件法》のように思われる。ドイツ語でも Konditionalis として一時《接続法》(普山の《附說法》)から分離した時期があり(Becker, 1864・元§1/Schäfer, 1882・贈15)、それが明治期の日本の独逸語において《約束法》と訳されたが、英語にこれが現れるのは珍しく、江戸幕府旧蔵洋書中の蘭文典にも 1 例しかない(Hamelberg, 1845・號2)。また、最後の 3 者はそれぞれ、7. a. 普通の疑問文、b. 否定疑問文、8. 肯定文、9. 否定文、を作る法のこと、当時の文法書ではしばしば、Modus とは別の「四法」として Conjugation——普山の用語では《転変図》——を構成している。英語では <manner> 或いは <form> と呼ばれるが、和蘭語では Modus と同じ <Wijze> となるため、両者を併せて「九法」としたのであろう²³。では、最後にひとつ残った 2. の《許可法》とは何か。原語は Ver-mogende Wijze (蘭)/Potential mood (英)であるが、これは、実は蘭文法には無いのである。

表 4 は、江戸幕府旧蔵洋書中の蘭・英・仏文典における Modus の構成を示したものである、5 箇所ほど <Potential mood> が現れるが、いずれも英文典に限られている。更に表 5 は、英文典のみの mood の構成を調査したものである。これによると <Potential mood> の初出は、1549 年の Lily-Colet の羅英文典であり²⁴、1621 年の Gill の英文典以降、ラテン文法の Optativus (祈願法)に代わって <Potential mood> が英文法において行なわれるようになったことが分かる。<Potential mood> とは、形態的には、can, may, must 等を用いて <力、出来べき、或ハ情態働作或ハ情ノ必要ヲ表ハス処ノ動詞ノ其形>²⁵である。天保 11 年(1840)の『英文鑑』でも《許可様》と訳され、結局この mood は、明治 30 年代に流行した Nesfield の英文典で否定されるまで、《可成法》《可能法》などとも呼ばれて続くことになる。『英文鑑』の底本の著者である有名な英文法家 L. Murray は、1861 年版の „English Grammar“において、

That the Potential Mood should be separated from the subjunctive, is evident, from the complexness and confusion which are produced by their being blended together, and from the distinct nature of the two moods ; ... (p. 78)

と述べており、《許可法》は、Subjunctive 《附說法》から分離した、英文法特有の Mood 《活言法》なのである。

(3) 缺助言

そして、この《許可法》に用いられる can, may, must 等の、現代で言う「助動詞」が、当時の英文法で Defective verb 《缺助言》として分類されるものである。藤林普山は《助言》を《缺助言》と《完助言》の二つに分け、前者の動詞として、

- | | | |
|-------------------------------------|--------------------------|-------------------------|
| 1. doen [do/to do/du:n] | 2. zullen [shall/sollen] | 3. willen [will/wollen] |
| 4. moegen [may/mögen] | 5. kunnen [can/können] | 6. moeten [must/müssen] |
| 7. behooren [(to belong)/(gehören)] | 8. laten [to let/lassen] | |

9. hebben [to have/haben] 10. worden [(to become)/werden]

を挙げている(英・蘭語辞書)。その定義はく是其一句二全ク満ザル意アル言であるが、これは、いわゆる不完全自動詞の意味論的説明であって、《缺助言》のそれではない、《缺助言》とは、過去分詞・不定詞・完了時制など、ある種の法・時制等を持たないため conjugation の一部が欠けている動詞のことである。明治の英文典においても《不具動詞》《缺動詞》《欠損動詞》《不足助動詞》等の訳語で以てその名が見える¹²⁶。

ところが、これらの《缺助言》のうちのほとんどが、当時の蘭文法では《助言》でないのである。江戸幕府旧蔵洋書中の蘭文典で見る限り、和蘭語の助動詞は、完了形を作る hebben (to have) と zijn (to be)、未来を作る zullen (shall, will) の三者か、或いは、これに受身の助動詞である worden (受: werden) を加えた四者かであり、can, may, must 等に相当する動詞は立派な本動詞である¹²⁷。従って、普山の挙げる《缺助言》は皆、和蘭語では完全な conjugation 《転変》を有する《完助言》なのである¹²⁸。しかも 1. の doen の場合は、和蘭語では《助言》ですらないので、普山には二重の混乱があることになる。doen 即ち <do> を《助言》とするのは英語であり(7.0 beheeren は英語でも《助言》ではない)、当時は専ら「強意の助動詞」として用いられている(do による疑問と否定はまだ一般的でない)。

Sewel は、前述の辞書中の蘭文典で、和蘭語の <Auxiliary verb> に関する註において、以下のように述べている。

This verb [zullen のこと] has also an Infinitive Mood which it wants in the English, ... : Yet it is to be noted, that they are not so Defective in Dutch as in English: for since they have not only the Participles of the Present Tense, as konnende, moettende, moegende, but also those of the Preter-Perfekt Tense, as Gekonnen, gemeeten, gemeogen, ... [() と下線は筆者] (p. 61)

(A brief and compendious Dutch Grammar. 1766)

確かに和蘭語の zullen に対応する英語は shall という Defective verb である、もし下線部の註がなければ、英語の知識しか持たない者、即ち、英語を母国語とする者が和蘭語の <Auxiliary verb> を考える場合、英語の shall 同様 zullen も《缺助言》であると、無意識のうちに思うことであろう、do については逆に、原典の英文典にこれが《助言》として記載されていて、それが対応する和蘭語に訳されて doen となったところの、いわゆる「蘭譯英文典」を、普山は『和蘭語法解』の底本としたのではあるまいか。それ故、和蘭語では《助言》、しかも Defective verb ではないはずの doen が、『和蘭語法解』では混乱して《缺助言》とされているのではないだろうか。

以上の3点——即ち、Sewel の英文典が PEYTON の文法書を参照していること、《許可法》が英文法の文法要素であり、また、doen (to do) が助動詞としての用法を持つのは英語であるということから、藤林普山の『和蘭語法解』の底本は蘭訳された英文典であると考えられるのである。『江戸時代蘭語学の成立とその展開』第Ⅱ部の註記には、「…岩崎克己氏は、<ペートンとは The elements of the English language...explained...by way of dialogue. の著者 V. Peyton を指すのであろうか>と述べている」とあるが¹²⁹、この指摘は、書名の当否はとも角、正しいのではないだろうか。もしこの推論が正しければ、英文典の本邦初訳は、天保11年(1840)の『英文鑑』ではなくて、この『和蘭語法解』ということになる。

4. 2. 訳文について

では、その訳文はどうであろうか。前章との比較のため＜hebben＞の conjugation 《転変》における直説法の訳し方を見てみると、次のようになっている。

現在	ik heb/hebbe	あり、ある、あれ、たり、たる、たれ、もてり、
未過	ik had	ありき、ありた、たりき、たり、き、てき、持ちき、
全過	ik heb/hebbe gehad	ありき、ありた、持ちき、
過過	ik had gehad	ありき、ありた、もちた、持てりき、てありき、
未来	ik zal hebben	あらん、たらん、あらう、たらう、てん、持ちん、

《未過》は《未成過去》(Imperfekt: 表3の《半過去》)、《全過》は《全成過去》(Perfekt: 《過去》)、《過過》は《過去過去》(Pluperfekt: 《大過去》)である、表3の明治期の訳し方と異なるのは、まず、《未過》《全過》《過過》という3つの過去に対して無理な訳し分けをしていないことである。これは、本来この三区分を持たない日本語の性質から言えば当然なことで、幕末・明治期に《全成過去》にのみ固定される＜ありた＞という語形が、三過去に共通して用いられている。

次に、この当時はまだ文語文による記述であるので、係り結びによる連体形・已然形終止のあることである。《現在》を例にとると、

●あり。たり。……終止形 ●ある。たる。……連体形 ●あれ。たれ。……已然形となる。そして、これらは《助言》としての訳であり、本動詞としては＜もてり＞である。

実際の文章の訳は、以下のようなものである。

- (1) 吾等ハ吾等ノ敵ヲ妨^{サマ}ク^ル能ハザラ^んとした (缺助言の例)
- (2) 吾ハ能ク歩ク^ルガデキヌ (許可法の例)
- (3) 「サロモン」ハ三百ノ妻ト七百ノ妾ト^{ありき} (未過の例)
- (4) 彼処ニ今子^ノハ果ガ少シバカリ^{ありき} (全過の例)
- (5) 吾ハ彼ガ来^{たる}ヨリ前ニシマヒ^{たり} (過過の例)
- (6) 彼男ハ彼女ニ婚セント思フ縦ヒ朋友ガ非^キ、ユルトモ (附説法の例)

(2)の＜吾ハ能ク歩ク^ルガデキヌ＞を、第2章で引用した明治期の訳文である＜彼ガ話シ能ハヌ＞と比べると、主格の助動詞が＜ハ＞になっており、＜～ガデキヌ＞という言い方をしているという点で、前者の文化8年(1811)『和蘭語法解』の訳文の方が、後者の明治17年(1884)『獨逸文法楷梯』のものより余程自然で現代に近い。(6)の附説法の文も、確かに訳調は古風であり、また「彼」「彼女」が当時まだなく、＜彼男＞＜彼女＞とこそなっているが、決してひどく不自然でも、文意不通でもない。これを、例えば、

If it were done when 'tis done, then 't were well, it were done quickly.

①

②

③

其レガ成サレテアル^キニ若シ其レガ成サレテアリシナラバ、然ル^キ其レガ能クアリシ其レガ速ニ為サレタリシ ①

②

③

(山形 閑譯補『須因頓大文典講義』(上)、明治27)

と比べると、それがよく判るであろう。この明治の文章は1894年のもので、(6)の1811年より83年も後に書かれているのである。この訳文は、表3に示したステレオタイプな訳し方の典型である。①②③の3つの＜were＞は《半過去》の定型に従って＜アリシ＞とされ、

「～なのだ」「～なのだが」という反実仮想の意趣が表現されていない。独逸語では、直説法過去<war>に対して、普山言うところの《附説法》、即ち接続法(仮説)は<wäre>となり、形態的にも明確に識別可能であるが、それでも、<wäre>が時制的に過去を意味する非現実仮定だと誤解する初学者は少なくない。ましてや英語においては、直説法も《附説法》もともに<were>であるため、<アリシ>という直説法と同じ訳語を用いることができてしまう。それが故に、<斯ノ場合ニ於テ過去トハ其ノ形態上ノ過去ヲ云フモノニシテ意義モ過去ト云フ義ニハアraz>³⁰ということが、かえって理解されにくくなってしまふのである。

他の直訳文典においても、この文章の訳はいずれも似たり寄ったりである。

○其レガ為サル、^レニ若シ其レガ為サ[ル、デアロウ]レシナラバ然ル^レ其レガ善クアリシ[アルデアロウ]其レガ速カニ為サ[ル、デアロウ]レシ

(斎藤桂堂譯『スウヰントン氏英文典直譯』松成堂、明治20)

○其ガ為サル、^レニ若シ其ガ為サレシナラバ[有テ有フ]然ル^レニ其ガ能クアリシ[有テ有フ]其ガ速ニ為サレテアリシ[有テ有フ]

(渡辺松茂譯述『スウヰントン氏英文典直譯』積善館、明治20)

○若シ夫レガ為サレテアリシナラバ若シモ夫レガ為サレテアリシ時ニ然ル時ニ夫レガ善クアリシ夫レガ速カニ為サレテアリシ

(田中達三郎譯述『須因頓氏大文典解釈』同盟書輯、明治21)

これらの明治の直訳を次のものと比較する時、人は語学の「進歩」ということについて疑いの念が湧き上がるのを禁じ得ないであろう。和蘭語の<zouden>(英: should, would/独: sollte)の意味用法に関する、万葉集の歌を例にとつての説明である³¹。

本歌：飛鳥川しからみ渡しせかませば流るゝ水はのどけからまし

仮令：飛鳥川ニシガラミ渡しシテセヒテ見タラバ嘸流ルゝ水カ長閑デヨカロー ニセカズ

ニアルカラー向ニ長閑ナフナト

推量：飛鳥川ニシガラミ渡しシテセ^(X)ク等カセヌ筈カシラネ^(X)セクナラハ水カ長閑ニ流ルゝデアロー

[下線等は筆者]

<zouden>が文語の「まし」に相当し、単なる「推量」ではなく、反実仮想の「仮令」であることが、<長閑デヨカローニ…>以下、見事な口語の言文一致体で以て示されている。この訳は、中野柳園『蘭学生前父』から採ったものである。著者の柳園は宝暦10年(1760)生まれ、安永6～7年(1777～8)頃、病のため18才で稽古通詞の職を辞して以来、ひたすらオランダ語研究に没頭、日本初の蘭文法学を創始し、文化3年(1806)、47才で長逝している。この『蘭学生前父』は成立年代が不明なのだが、長崎に遊学した大槻玄沢が柳園に会い、その著述したものを江戸に持ち帰ったのが天明5年(1785)であるから、若しこの時点で成立していれば、『オランダ語法解』とは26年、明治27年(1894)の山形閑訳『須因頓大文典講義』とは、実に109年の開きがある。明治を遡ることおよそ1世紀前に、既にこのような達意の言文一致体の訳が、蘭語を研究する者の手によって為されているのに、それが何故、明治になると、先述の仮定法の訳文のような、或いは第2章に引用した英・独の不定法の解説のような、文意不通の難解なる「迷文」にならねばならないのであろうか。『蘭学生前父』には、この他にも、

持統天皇ノ御歌モ万葉ニアル本歌ハ夏来ルらしトアリ俗ニ夏ガ来タソーナト云らしト
常ノらんトノ分別スベキ蘭語未タ思ヒ得ス misschen(紛) was hij hier gekomen 彼
ひと爰に來にけらし²³² [下線及び()の注は筆者]

のような口語による記述が見られる。

今でこそ口語体の書きものが巾を利かして來たものゝ十年、二十年、さては三十年も前に上ると普通文は云ふも愚か、手紙にても之を使ふものなら丸で女郎の文見た様なと一口にけなされたものである。所が今はどうか、手紙は云ふも更なり新聞から雑誌から、単行本の書冊まで此体によるものが多く、往々祝文、祭文、届書に迄口語体を見ることがある、尤も同じ口語体と云ふ内にも結構の上に色々趣が異なったものがあるが先づ大体では口で述べる様に書く文体が行き渡って來た、

とは、明治42年『新式初等英語獨修』(長井氏²³³著、博文館)の言であるが、明治19年、山田美妙・二葉亭四迷が言文一致運動を起こすはるか以前に、この運動には、蘭語研究によって培われた長い豊かな前史があるのである。

しかし、江戸時代の蘭語学の訳文がすべて、柳園のものの如くに秀でていたわけでは勿論ない。話を『和蘭語法解』の6つの訳例に戻すと、(4)の<彼処ニ今子ンハ果ガ少シバカリありき>の場合など、原文との対照なしには理解が多少妨げられるきらいがあり、幕末・明治期の直訳につながる傾向が見られるようにも思われる。

彼處に あり 今年ハ 少 果 き

Daar zijn van t'jaar weinig apelen geweest.

が、やはり、文章の自然さという点では、蘭語学における訳語は明治期の直訳文典にはるかに勝るのである。天保11年の『英文鑑』にしても、意味不通の「迷文」では全くない。文体こそ言文一致の口語文ではないが、例えば、次のような関係代名詞の文を、

The woman, *who* are there, have told it.

其処ニ居ル所ノ女等カ夫レヲ語レリ

と訳している。それが、幕末・明治の文典になるとこうなってしまうのである。

○辭ガ 夫ハ 一ツノ國語ノ組立ヲ 為ス所ノ 辭ガ 種々ノ性質ノモノデアル…

(竹内宗賢『和蘭文典読法』安政3)²³³

○他動詞ハ モノ、デ 夫ニ於テ 働キガ 夫レ 夫レハ 働ク所ノ 夫レカラアル
モノ 夫レハ 働キカケラルル所ノ アルモノ □□□ 達スル所ノモノ、デアル

(渡辺五一郎直譯『ビネラ氏原書英文典獨案内』東生氏蔵、明治16)

○動詞(動詞) 夫レハ 想像 即チ 理解ヲ 与ヘル処ノ 夫ニ就 何ヲ 物等ガ
ナス 或ハ 何ガ 彼レ ニ ナサル、カノ 物等ノ 働ニ 就テ

(セーフエル氏原著・的場素一挿訳『挿譯訓解獨逸文典指針』競美堂、明治18)

まさに原文に則した、先行詞と関係代名詞の二重訳である。これが「直譯」というもののなのである。そして、これらの直訳文典で用いられた翻訳語は、上述のように、日本語としてはまさに最悪だったのである。

5. 結語

「天才的」と言われた森嶋外のドイツ語の基礎は、蘭語学習にあった。

父は所謂蘭医である。オランダ語を教えて遣らうと言はれるので、早くから少しずつ

鴨外五十三才春の筆である。ここに出てくる文典の前後編とは、熊坂蘭齋あるいは箕作阮甫の翻刻出版した、*<Grammatica>* と *<Syntaxis>*——詳しくいえば、日本語で *<和蘭文典前編／後編>* 名で出版された *Maatschappij* の „*Grammatica*” / „*Syntaxis*” で、天保一年（一八四〇）、天保十三年、嘉永元年（一八六二）などに出版されている。文久二年生まれの鴨外より二十年ほど前である」⁴³⁴。

[illegible][illegible]

『日独文化人物交流史』に、小倉にいた鴎外が東京のく長男於兎(一〇歳)にドイツ語の通信教育を行なうために書き送った毛筆の稿本^{13, 5}が収録されている。その中の《半過去》と《過去》の訳語が、表3のものと違っているのである。

→ 《半過去》；表3では〈愛セシ〉

Ich habe zu meiner Freude vernommen, dass mein Vater in Kokura eintraf.

私ハ喜ンデ聞イテシマツタ——

→《過去》；表3では<愛シタ>

私ノ父が小倉ニ到着シタコトヲ

全く現代と同じである。長男が十歳という明治33年頃であるが、表3を見る限りでは、完了形を「…してしまった」と訳しているものはまだない。長い間《真ノ過去》であった perfektum は、日本では明治20年代に「過去」と「現在」の間を動揺し、この30年代に至ってようやく《完成現在》として定まる傾向を見せる。英語においては、Nesfield 文典の影響で、perfect は時を示す <form> の一種であり、時制 <lense> ですらなくなっている（⇒表6参照）。それにもかかわらず幕末以来の《過去》としての訳語を用い続ける直訳文典と、同じく幕末の蘭学の子でありながら正しく切り変えた鵬外との認識の相違を、鵬外のこの perfektum の訳語は表わしているかのようである。

が、文章的には、鵬外はやはり江戸の人であろう。明治23年の処女作『舞姫』は、情緒纏綿たる雅文である。それ以前の諸論文・翻訳も漢文もしくは雅文調であり、彼が言文一致の口語文でものすようになるには、今暫くの時が必要であった。

夏目漱石はどうか。鵬外に遅れること5年、維新を翌年に控えた慶応3（1867）年に生まれた彼は、成立学社に英語を学び、明治23年（1890）、帝国大学の英文科に入学する。既に蘭学の子ではなく、欧米人が欧語で全教科を講義した明治初年の時代ももはや過去のものとなっていた。漱石が英語を学んだ時期——即ち、明治16年の成立学社入学から帝大を卒業する明治26年までの時期は、上述のように、明治20年を頂点とする直訳文典の横行した10年間とぴったり重なっている。漱石も、英語を習い始めた成立学社の頃にでも、或いはく一、二、三を以て返り点を附したる書に触れたことがあったかも知れない。そして、入学した帝国大学で、彼は次のような経験をする。

私は大学で英文学という専門をやりました。その英文学というものはどんなものかと御尋ねになるかも知れませんが、それを三年専攻した私にも何が何だかまあ夢中だったのです。その頃はヂクソンという人が教師でした。私はその先生の前で詩を読ませられたり文章を読ませられたり、作文を作って、冠詞が落ちているといって叱られたり、発音が間違っていると怒られたりしました。試験にはウォーズワースは何年に生れて何年に死んだとか、シエクスピアのフォリオは幾通りあるとか、あるいはスコットの書いた作物を年代順に並べて見るとかという問題ばかり出たのです。年の若いあなた方にもほぼ想像が出来るでしょう。果してこれが英文学かどうだかという事が、…³⁶

明治20年『ディクソン英文典直譯』（佐野友三郎譯、攻玉社藏版）は、この漱石の師であつた<ヂクソン>氏の書いた文典であろう。見れば、その文章は<教師ガ厩ソレニ向テ彼等ノ心ガ用意シテアル所ノ厩ニ於テ彼等ニ迄静カニ話サル、所ノモノニ続クベク如ク英語ヲ以テ左様ニ遙カニ會得シタル>³⁷調の、典型的な直訳である。しかも、その内容はまるで論理学の講義のようで、これで英文法が理會できるとはとても思えない。英国留学当時の漱石の辛さは人のよく知るところであるが、それ以前に、冠詞を

欧羅巴ノ国語ソレハアリストートル氏ノ論理学ノ勢力ノ下ニ來タ所ノ欧羅巴ノ国語ニ於テノミ我輩ハ思想ソレニ於テ冠詞ガ基テアル所ノ思想ヲ握ルベク余リ若クアル所ノ子供、商売スル所ノ支那人及ビ他ノ無学ナル東洋人ハ全クソレヲ用ヒナサヌ何トナレバ彼等ノ粗暴ナル而シテ迅速ナル談話ニ於テ彼等ハソレヲ棄テ能フ故ニ、冠詞ハ論理学

と説明する外国人教師の授業の方が、よほど大変だったのではないだろうか。

そして、二葉亭四迷である。彼は、鴨外に遅れること2年、漱石に先立つこと3年の元治元年(1864)に生まれ、8歳の頃名古屋学校に入学し、仏人より直接仏語を学んだ後、明治14年(1881)、18歳で東京外国語学校に入学し、19年に退学するまでの5年間を露語学習に精進する。8歳の頃とは明治4年であるが、当時は、全科目を外国人教師が原語で行なう官立・私立の洋学校が各地に建てられ(明治10年頃までにほとんど廃止)、また、鹿藩置県前夜の明治2年頃は、各藩において、藩校としての洋学校が設置されたので(鹿藩置県に伴いほぼ廃止)、そのような学校のひとつで、幼い二葉亭も、国・漢学に先んじて洋学修業を始めたのである。しかし、この時はわずか一年で中断され、再び、今度はロシア語としてそれが開始されたのは、鹿鳴館とともに始まる第2次洋語ブームの少し前であった。よって、彼のロシア語学習の時期も、明治16年から始まり20~21年を頂点とする、ステレオタイプの訳語を持つ漢文訓読式直訳文典の流行期と、ほぼ重なっている。

第2章で述べたように、幕末に始まったこの「直訳文典」というのは、＜オランダ語の意味を伝えるのを主眼としただけのもので、日本語として正規な文章の体をなしてはいないのである。オランダ語から翻訳した場合、それが日本語の文章として整った形をとりうとすると、それは、漢文書き下し体にするのが一般であった＞¹⁸³⁹。意味を伝えることのみを主眼とするのは明治の直訳文典も同じである。だが、明治30年代になると、直訳のスタイルが依然として続く一方で、ようやく半分文語・半分口語のような書き下し文も見られるようになる。二葉亭に遅れること、逆に二葉亭が時代に先行すること、約10年である。

70. A Verb is a word by means of which we can say something about a person
 動詞ハ 語ニ 依テ 事ヲ 言フ 能ハルモノナリ
 (意訳) 動詞トハ 吾人ガ 人間或ハ 事物ニ 関シテ 或事項ヲ 言ハントスルニ 必要ナル 詞ニシテ 此詞ノ 手段ニ 依テ ヌラバ 何事モ 述フルニ 能ハザルモノナリ

(栗野忠雄譯『意訳挿入ねすふいーど英文典第式獨案内』青野文魁堂、明治33)

「言文一致」という意識こそしっかり持ったものの、欧文に合わせた余り日本語とも言えぬ日本語の溢れたこれらの直訳文典を調査して判明するのは、要するに、明治の洋語学には新たな日本語を育てようとする意識がないということである。つまり、英語であれ獨逸語であれ、日本語とは構造の異なる西洋語の学習を通じて、逆に我身を顧る視点が欠落しているのである。

第四、文法を説くには日本語の文法も併せ説きて彼我対照すべきに、著作者は英米人に向って教授する如く只英語の文法のみ説き、或は全く之を説明せず、為めに読者をして文意の了解に苦しましめたこと、

(石川辰之助編『通俗英語獨案内』「緒言」、博文館 明治21)

これは、直訳文典の刊行がピークに達し、二葉亭が『めぐりあひ』を発表した年に出版された英文典に記された、英語修得失敗の原因のひとつである。結果、明治の洋語学は、

…本邦ニ在テモ 夙ニ 高等小学校ニ至ル迄 英語科ヲ 置キタルモ一昨年来 地方 高等学校ニ於テハ 多ク 其科程ヲ 廃シ 東京ト雖モ 纔ニ 随意科トシテ之ヲ 存スルニ 過キス

(崎山元吉『英語教授書』「自序」、崎山蔵梓 明治26)

という事態に陥ってしまう。中野柳園や藤林普山の蘭文典が、和蘭語の文がいかなる日本

語に相当するか、例文の訳を丁寧に示しているのに対し、明治期の文典は、品詞説明と語形変化のみがあって、例文は原文のまま和訳されていなかったり、例文の部分がそっくり割愛されていたりするものが少なくない。つまり、例えば、＜接続法ハ約束、擬似、而シテ偶然トシテ情態、働作或ハ情ヲ表ハス＞^{註40}ことは解っても、それがどのような日本語の表現となって現れるのかが解らないのである。故に、洋文が理解できず、たまに和訳が付いていると間違っていたりする。

「If I knew, I would tell you.」 知っていてれば話した ^{註41}

さもなければ、如何なるニュアンスも全部無視して、例の「直訳」一点張りである。

- (1) 単純ナル未来：He *will* go to Nakanoshima. 彼ハ中ノ島マデ行クデアロウ
- (2) 約束：You *shall* get the book. 汝ハ書ヲ得ルデアロウ [→貴君ハ書ヲ保持ササレ]
- (3) 習慣：I *will* go there every morning. 私ハ毎朝ソコ行クデアロウ
- (4) 謙讓：I *should/would* like to see it. 私ハ夫レヲ見ルベク好ムデアロウ [→ナラバドウカ拝見シタト思ヒマス]
- (5) 過去ニ於テノ決心：I *would* go there. 私ハソコ行クデアロウ [→私ハ行コウト思フテ居リマス]
- (6) 主格が他者ニヨツテ束縛：You *should* go there. 汝ハソコ行クデアロウ [→汝ハソコ行クベシ]
- (7) 事実ニアラザル未来：If I *should* go there, I *would* be a learned man. 若モ私ガソコ行クデアロウナラバ私ハ一博學ナル人デアルデアロウ

これらの出典は、明治33年『英語全科卒業書』（船越守中著述、矢島誠進堂）である。この文典では、直訳の他に「[]」で示したような「譯解」が時々付けられていて解りやすいが、他の直訳文典では、これがないのである。「譯解」以外にも、例えば(4)に関する

茲ニ注意ノタメ一言シ置ク前段ノ例文ハ謙遜ノ意ヲ表示スル為メ助働詞ヲ付シテ假リニ謙遜ノ意ヲ示シタルナリ…(オ見セナサヒ)(見セヨ)等云フ語氣ニアラズ充分謙遜ノ義ナリト知ルベシ

のような解説は、この文典以外では多くは見られず、＜…好ムデアロウ＞という直訳のままなのが普通である。だから、＜今まで世にありふれてゐる英語獨修書のありとあらゆるものは、国語の譯文に必ず誤りがあります。即ち国語に通じない人の手になったものばかりであります＞^{註42}ということにもなるのである。本国直輸入文典を見て解らず、＜直譯的劣文＞を羅列しただけの和訳文典を読んでも更に理解し得ず——当時の文典に頻出する＜隔靴搔痒ノ憾＞という言葉は、明治時代の洋語学習を象徴するキー・ワードである^{註43}。

当時の日本人が、否、現代も同様かも知れないが、「手塩にかける」ことを等閑視し、いかに洋語の速修をせよと、明治20年前後の、その中身は絵入りの単語集と簡易な初歩会話に過ぎないのに『〇〇語獨案内』等の書名を持つ書籍の出版数の多さが、如実に物語っている。この焦りのゆえであろう、あれほど欧羅巴の模倣に狂奔した日本であるのに、当時の欧州での一般的教授法である「外国語の初歩は母国語で学ぶ」という一事だけは、当の御備外国人教師からさえ批判の声が上がったにも関わらず^{註44}、模倣することを拒み、欧州留学からの帰朝者をして、

外国ノ小学校用読本ヲ以テ初學者ニ修読セシムルハ恰モ外国ノ兒童ニ日本小学校用ノ読本ヲ習読セシムルト何ソ異ナランヤ (崎山元吉『獨逸学捷徑』序、崎山敬甫 明治24)

と言わしめた方法を採用したのであった。

第3章で引用した太田雄三氏の言のごとく、10歳頃から10年近く＜自国語や自国語を通しての文化を犠牲にしてまで、欧語を重視した教育＞を受けた明治初期の世代は、代わり

に日本語の能力を失った。この反省から、明治16年に第2次洋語ブームが始まるまでの数年の間に、漢学が復興する。二葉亭も、明治5年に名古屋学校を退学してから14年に東京外国語学校に入学するまでの間に、漢学を学んでいる。もしあのまま仏語学習を継続していたら、年代的にいつても間違いなく、日本語に不自由した明治初期世代の仲間入りをしていたことであろう。

杉本つとむ氏は言う、江戸の蘭学者は、同時に漢学者であったと。太田氏も述べている、漢学の素養が英語の進歩に寄与すること大であったと⁴⁵。中国語を学ぶ漢学が、外国語という点では共通の洋語学習の基礎となったからであるが、それ以外に、漢学の知識を持つ者は、和語しか知らない者よりも、ヨーロッパ語の概念を漢字を通じて的確に理解・把握することが出来たからではなかろうか。和語にはない概念も、漢字を使えば表わすことができる。適当な漢字がなければ、新たに国字を造り出すことも可能である。だからこそ、明治の訳語はほとんど漢字の熟語なのであろう。しかし、幕末・明治初期の日本は、漢字の煩雑さを厭い、わずかに6文字の「空別泄」の簡潔さに優位を認めた。その熱狂的な西洋崇拜は、欧文に合わせて日本語を解体することを躊躇せず、直訳文典に見られるような意味不明の〈劣文〉を生み出した。まさにこの点こそが、幕末・明治の洋語学と江戸時代の蘭語学との大きな相違である。後者には、和蘭語に合わせて日本語を崩すような身売りの態度が極めて希薄であるのは、既に見た通りである。現代の教室翻訳語も、通常用いられる日本語との乖離が大きいという点では、幕末以来の直訳の系列に連なるものと言えるであろう。そして、このような和漢文の軽視およびその知識の低下が、結果的に洋語の理解力を弱め、多くの〈隔靴搔痒ノ憾〉の嘆きとなるのである。

新文体創造を目指した明治の文人達は、多かれ少なかれ、このような洋語学習の体験者である。洋語学習なくして新しい日本語創造への意識の覚醒はない。しかしそこには、欧語とそれに即した漢字・片仮名の直訳語はあるが、言文一致の「日本語」はまだ存在していない。それ故、日本語の新文体を、彼等は、自らの苦しみと引きかえに生み出さねばならなかった。隅外は「マトマタ<族>」という言い方が当時まだなかったため、「マトマタ<種>」と訳さねばならなかった⁴⁶。漱石は、あの小説の構想メモに見られるような英語と日本語の混合を、とりあえず日本語のみの小説に仕上げねばならなかった。そして、二葉亭は、句読点をも含めた言文一致体の文章を、明治21年という直訳文典横行の最中に、即ち、日本語が最も壊滅した時期に、世に問わねばならなかったのである。

このような——そして再び、結語は第2章のそれに戻る——江戸時代の蘭文典の口語訳から後退したかのような、日本語とは言えない〈直譯的劣文〉の日本語で明治の人々が洋語を学んだことを踏まえて、二葉亭の『めぐりあひ』等の作品を読むと、コンポジションの定まらぬ言文一致体で以て、範とすべき手本もなく、あれだけの文章を綴ることの労苦が、つくづく思い遣られるのである。〈あざやかな大粒の星は黒ずむた蒼空にきらつき切つてゐた〉のような表現に接すると、その新奇さに違和感さへ覚えるが、二葉亭は、余りにも鮮やかに皎々と輝く星々を新文体でいかに形容すべきか、どれほど腐心したことであろうか。しかし、言文一致体でかくかくの表現ができるものなのかどうか、という問に対する手がかりは、西洋崇拜の余り日本語を欧文に合わせて解体し、その自然な表現を犠牲にしていた当時の洋語学習からは、得ることができなかったのである。

●注

1. 明治文化全集別巻『明治事物起源』明治文化研究会 昭和44, p. 582.
2. ⇨注1書 p. 660: 「言文一致論」
3. ⇨注1書 p. 657: 「親友社の始」
4. 杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』V (以下「蘭語学」と略称す)。早稲田大学出版部、昭和56 p. 31~70: 「蘭語学における記号および句読法」
5. 「綴写得師草稿」には2種類ある。ひとつは「高野長英全集」第4巻(高野長編 昭和6)所収のもの、ひとつは「海外事類雑纂」第四日録に収められたものである。後者は分量が前者の倍近くある(国会図書館所蔵)。
6. Beijer, J. C., *Beknopte Handleiding tot den Nederlandschen Sijl*. Te Rotterdam, 1853. 4518
7. 明治30年代の英文法は、英領インド学生のために書かれた Nesfield 文典の流行で大きく変わる。その変化は時制組織、特に Perfect の扱いにおいて顕著で、現代のものとも異なり一種独特である。ドイツ語でも Perfect が「過去」から「現在」に移行する。そして、幕末からの語学的影響がほとんど姿を消すのがこの時期である。
8. 長井氏蔵著「新式初等英語獨修」「序」、博文館 明治42。
9. 太田雄三「英語と日本人」講談社学術文庫 1995, p. 71。
10. ⇨同上書 p. 79。
11. ⇨注1書 p. 539。
12. ⇨注4書「蘭語学」II, p. 1150。
13. 当時の時制区分は、現代のそれと異なり「交角的五分法」(die gegabelte Fünfzahl)といわれるもので、ひとつの「現在」、三つの「過去」、ひとつの「未来」から構成されている。三つの「過去」とは Imperfekt, Perfekt, Plusquamperfekt であるが、前二者は、現代の洋語、特に英語の知識で判断すると完全に誤る。当時の Imperfekt (I loved) の主な用法は、いわゆるアオリストで、過去のことを、今現在、眼前で展開しているかのように語る「過去の現在」として「現在」と関係をし、一方の Perfekt (I have loved) の方が、逆に、「現在」とは何の関係も持たない「孤立過去」「真ノ過去」である。つまり、現代とは全く逆なのである。幕末の蘭語学の *„like Grammar“* である *Maatschappij* の *„Grammatica“* (作州算作氏蔵版、天保13) では、Imperfekt (de onvolmaakt verledene tijd) と Perfekt (de volmaakt verledene tijd) が次のように説明されている。

1145. De onvolmaakt verledene tijd, --- stelt eene zaak voor, die voorbij is op den tijd, waarin men spreekt, maar nog durde op den tijd, waarvan men spreekt, of duidt eene handeling aan, welke nog niet geheel voorbij is, wanneer eene andere begint, ---

不完了過去 (Imperfekt) は、我々が話している今の時点で既に過ぎ去っているが、我々によって語られるその時にはまだ継続している事柄か、或いは別の行為が始まる時まだ完全に過ぎ去っていない行為を表す。

1146. De volmaakt verledene tijd stelt eene zaak voor, als geheel geelindigd op den tijd, waarin men spreekt zonder eenig op zigs op eenige andere tijd, op eenige andere handeling.

完了過去 (Perfekt) は、我々が話している時には完全に終了した事柄を表す。他の時、他の行為との関係は有していない。
14. 田原 榮著『文典と解英文指針』「序」、大平俊章・江草芥太郎刊 明治17
15. 岡山元吉「英語教授書」「自序」、岡山蔵梓 明治26
16. 平塚定二郎編輯「獨逸文法楷梯」後編：文章論、荒川邦蔵出版 明治17
17. 鷺山弥生「和文獨譯獨逸作文獨修」「獨逸作文二就テノ心得」、誠氏堂 明治33
18. 国吉直麻著「簡明獨逸文典」「緒言」、南江堂 明治34
19. ⇨注4書「蘭語学」I p. 618
20. ⇨同上書 p. 658
21. ⇨「蘭語学」II p. 948
22. 同上書 p. 949
23. ⇨表6参照。
24. 正確には英語で対訳されたラテン文典であるが、その英語の説明がそのまま英文典としても使用できる。なお、この時代は、純粋な英・獨・仏語文典は存在していない。英語の場合、刊行された最初の英文典は表5の Bulliokar である(⇒波辺昇一「英文学史」研究社、昭和41 p. 88 参照)。
25. 戸代光大譯「容易獨修英文典直譯」大倉書店 明治20
26. 《不具動詞》⇨田原 榮著『文典と解英文指針』梅原蔵版 明治17
《缺動詞》⇨青木翰清編述「無類捷徑英學童子解」同盟社 明治18他
《欠拒動詞》⇨喜内芳樹「ねすふいーど英文典第三卷講義」金刺氏発行 明治33
《不足助動詞》⇨波辺五一郎直譯『ピネラ氏原著英文典獨案内』東生氏蔵 明治16他
他に《不完全働詞》《不完了動詞》《缺乏働詞》《欠点動辭》《不十分働詞》《缺式働詞》《缺略動詞》等、種々の誤語がある。
27. 現代のドイツ語においても wollen(will), können(can)等の、所謂「話法の助動詞」は、不定詞及び完了形を作ることが可能であり、本動詞としての性質を強く保持している。これらの助動詞は、明治13年多賀貞一郎譯「セーフェル氏文典直譯」では《書キマス処ノ助動辭》、明治18年平塚定二郎口譯「シェーフェル氏獨逸文法獨学」では《替ノ助動詞》と呼ばれている。原語は die unschreibende Hülfsörter であるが、これと全く同意の和蘭語 de onschrijvende werkwoorden が、1845年の Hamelberg (p. 102) に見える。英語ではこれらが《転変》の一部を欠く《缺助言》なわけである。
28. worden についてはく被スルニ此言ハ完助言ノ属ナリ誤テ此ニ出ダス看官缺助言トスルノ勿レ>という昔山自身の注釈がある(四十五葉・裏)。
29. ⇨「蘭語学」IV p. 1011
30. 船越守中著述「蘭語全科卒業書」大阪・矢島誠進堂 明治33, p. 362

31. ⇒『蘭語学』Ⅰ p.284
32. 同上書 p.286
33. 松村 明『洋語資料と近代日本語の研究』東京堂出版 昭和54. p.20f.
34. 杉本つとむ『外国語と日本語』桜楓社 昭和56. p.199. 嚙外の文の出典は『サフラン(番紅花)』(大正3)より。
35. 宮永 孝『日独文化人物交流史——ドイツ語事始め』三修社 1993. p.335f.
36. 夏目漱石『私の個人主義』より。
37. 佐野友三郎譯『ディクソン英文典直譯』『緒論』、攻玉社蔵版 明治20. なおこの文章は、前節で言及した國係代名詞と先行詞の二重訳の好例である。
38. ⇒同上書 p.12
39. ⇒注33書 p.21
40. 中西 簡譯『ブラウン氏英文典直譯』二書房蔵版 明治17
41. 英語研究会著『教科書用参考中等英文法通解』際谷書店 明治44
42. 高橋龍雄著述『初等自修新書(全)』「叙言」、帝國書院蔵版 明治44
43. ○水田義原編輯『新撰英語自在』「序」、瀨山左吉 明治19 (第二版)
 …方今英語学ノ隆盛ヲ為スモ初學上ノ為メ懇切ナル著書ナキヲ以テ蘭語ノ體ナキ能ハス… (下線は筆者)
 ○水野繁太郎校閲、田中健太郎編纂『獨逸文法屈曲變化一覽表』「例言」、南江堂 明治36
 獨逸文法ニ屈曲多ク變化煩雜ナルハ學生ノ最モ困難ナルトコロナリ而シテ之レニ熟練シテ談話ナキニ至ルニアラザレバ誤解ニ作文ニ蘭語體ヲ用ニシモアラズ…
 ○生田弘治・星野久成・森田米松共著『中学英文法講義』「緒言」、東華堂書店 明治41
 …例々適當の文法書あれば英語にて説き英文にて解く為、初學者に於ては充分其意義を得得ずして蘭語體の體なき能はず。…
44. ○英國砲兵士官ブリンクリ氏著『語学獨案内』「自序」、日就社/文学社/岩崎健太郎他 明治8/19/20
 泰西諸國ノ人他國ノ語ヲ學ブ也皆自國ノ文字ヲ以テス故ニ學ビ易シ唯日本國ハ然ラズ英語ヲ學ブニハ初ヨリ英語ヲ用ヒザル能ハズ只其用ヒザル能ハザル而シテ其學ニ學ビ難シトス如何トナレバ日本語ヲ以テ其用法ヲ解明セシ良書ニ乏シケレバナリ 之ヲ愛ヘ此編ヲ述テ童蒙學ビ難キノ患ヲ除却ト欲ス耳
 ○八杉貞利『スーパート氏の語学教授法』第九章(『言語学雑誌』第二卷第三号、富山房 明治34 所収)
 …會話にのみ依頼して、一國語を習得せんとするのは、大なる間違である。先ず本國に於て適當な方法組織の下に、十分の精養をつむこと無く、直ちに其語のはなする社會にとびこむといふ事は、其人をして終に一語をも完全に習得しえざらしむる所以である。…
45. 杉本つとむ『江戸時代外国語の受容とその影響』(『外国語と日本語』桜楓社 昭和56. p.45f.)
 太田雄三 ⇒注9書 p.143f.
46. 森 嚙外訳『綠葉集』明治22

●参考文献

前回の他に今回使用したものは、以下の通りである。

1. 藤林普山『和蘭語法解』水玉堂 文化8(1811)
2. Maatschappij『和蘭文典(前編)』作州実作氏蔵版 天保13(1842)
3. 杉本つとむ編著『英文鑑—資料と研究—』ひつじ書房 1993
4. 明治文化全集別巻『明治事物起源』明治文化研究会 昭和44
5. 杉本つとむ『蘭語と句読法』桜楓社 昭和56
6. 同『蘭語学とその周辺』桜楓社 昭和56
7. 同『外国語と日本語』桜楓社 昭和56
8. 太田雄三『英語と日本人』講談社学術文庫 1995
9. 松村 明『洋語資料と近代日本語の研究』東京堂出版 昭和54
10. 日本英学資料刊行会編『長崎原本』『諸厄利亜興学小笠』『諸厄利亜蘭林大成』研究と解説 大修館書店 1982
11. 大槻如電原著・佐藤榮七増訂『日本洋学編年史』錦正社 昭和40
12. 日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂 昭和59
13. 井田好治『文化年間における西洋(蘭・仏・英)文法論』『九州文化史研究所紀要』九州大学九州文化史研究施設 昭和42所収。
13. 鈴木重貞『ドイツ語の伝来—日本独逸学史研究—』教育出版センター 昭和51
14. 別冊国文学・No.37『森嚙外必携』学燈社 1989
15. 文芸読本『夏目漱石』河出書房新社 昭和51

●使用した文法書

表2、表4、表6で用いたオランダ語・ドイツ語の原典については、拙論『蘭・英・独語学における文法用語の成立と変遷1』(『外国語教育論集』第17号、筑波大学外国語センター 1995)の文法書名一覧を参照。

明治時代の文典については、表1、表3、表6の書名、および前述の拙論中の文法書名一覧を参照(その他、細目はお省略)。

表5における原書の英文典の出典は以下の通りである。

- 渡辺昇一『英文法史』研究社 昭和40 より⇒ Bullock, P. Gr, Hume, Gill, Butler, B. Jonsson (含ラテン文典)
- ENGLISH LINGUISTICS 1500—1800(A Collection of Facsimile Reprints). Selected and Edited by R. C. Alston. Menston, 1967—1970 より⇒ Lily-Colet(1549), Wharton, Arckin, Miene, Clare, Collier, Kirkby, Gough, White, Pennie, Harrison, Webster, Murray(1795)
- 江戸幕府旧蔵洋書より⇒ Sewel, Locke, Hamelberg, Murray(1852/1861), Beek, Gerdes, Lloyd, Quackenbos
- その他⇒ Swinton, Pineo

(三) 灶

— 43 —

年 号	著 者 著 名	Form of Conjugation	肯定	否定	疑問	否定疑問	受 身	進行形	強調体
1894 (第22)	尾崎士郎		1. 通常ノ体		4. interrogative			2. 連続	3. Emphatic
1896 (第23)	尾崎士郎	形		2. 打消ノ形	1. 疑問 疑問形				
1897 (第23)	尾崎士郎	配合ノ四体	1. 正體体	2. 負體体	1. 疑問体	4. 負體疑問体			
1898 (第31)	尾崎士郎	配合ノ形状	(1. 不定)		3. 疑問体			1. 恒體体	2. 強調体
1899 (第32)	尾崎士郎	Form		4. 否定式			2. 受動形	1. 連続形 (不完了)	
1900 (第32)	尾崎士郎	配合ノ諸形			3. 疑問式	4. 疑問疑問形		1. 連続形	2. 強調形
1900 (第32)	尾崎士郎	形	1. 不定形	2. 連続形 Continuous	2. 連続形	3. 肯定形 Perfect	4. 完成連續形 Perfect Continuous		
1900 (第32)	尾崎士郎	形	1. 不定形	2. 連続形	2. 連続形 Imperfect	3. 完了形	4. 完了連續形		
1900 (第32)	尾崎士郎	形	1. 不定	2. 連続		3. 完了	4. 完了連續		
1900 (第32)	尾崎士郎	形	1. 不完	2. 連続		3. 完了	4. 完了連續		
1900 (第32)	尾崎士郎	形	1. 不定形	2. 連続形 (不完形)		3. 完成形	4. 完成連續形		
1901 (31)	尾崎士郎	斷詞配合四体	1. 正體体	2. 負體体	3. 疑問体	4. 負體疑問体			
1903 (31)	尾崎士郎	形	1. 不定形	2. 連続形		3. 肯定形	4. 完成連續形		
1903 (31)	尾崎士郎	形	1. 不定形	2. 連続形		3. 完了形	4. 完了連續形		
1911 (41)	尾崎士郎	形式	(1. 不定形)		3. 疑問形	4. 否定疑問形	3. 進行完了	1. 進行形	
1911 (41)	尾崎士郎	形, Form	1. 不定形	(2) 否定の形	2. 進行の形	(3) 疑問の形			

江戸時代の輸入書・英・仏文典及び明治時代の直訳文典等における「四法」以外の《法》の構成を、表6としてここに示す。これによると、＜肯定＞＜否定＞＜疑問＞＜肯定疑問＞の《四法》「Willie/Join」を示すことは、当時の文典では一般的であり、「和蘭語法」にのみ特有のものではないことが判る。そして明悟が進むにつれて、Formとしての《法》の内容も次第に変化していく。